

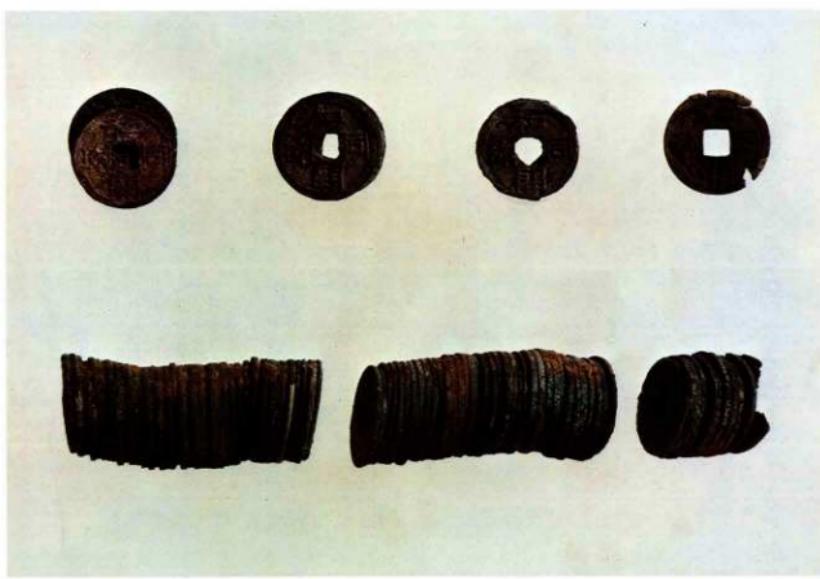
ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XII — 4

1985. 3

滋賀県教育委員会

財団 法人 滋賀県文化財保護協会



和同開珍



序

滋賀県下の県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、は場整備事業の拡大とともに、その件数も年々増加し今年度は36遺跡を数えることになりました。

ここに、実施しました発掘調査の報告書を刊行し、広く埋蔵文化財に関する理解を深めていた
だく・一助にしたいと存じます。

なお、今回は上記の遺跡のうち整理の完了しました25遺跡を9分冊に分けて刊行するものであ
ります。

最後になりましたが、は場整備に伴う発掘調査の円滑な実施にご理解をいただきました地元関
係者並びに関係諸機関に対し、深く感謝申しあげますとともに、この報告書の刊行にご協力いた
だきました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課長
市 原 浩

目 次

第1章 蒲生郡日野町宮ノ前遺跡

1. はじめに	1
2. 位置と環境	2
3. 遺構	4
4. 遺物	11
5. 宮ノ前遺跡出土の和同開塚の保存処理と材質分析	16
6. まとめ	19

第2章 蒲生郡蒲生町外広遺跡

1. はじめに	29
2. 位置と環境	30
3. 調査経過	32
4. 検出遺構	34
1. A地区	34
2. B地区	34
5. 出土遺物	38
6. まとめ	38

第3章 蒲生郡蒲生町野瀬遺跡

1. はじめに	39
2. 位置と環境	40
3. 調査経過	42
4. 検出遺構	44
1. 第1トレンチ	44
2. 第2トレンチ	45
3. 第3トレンチ	45
4. 第4トレンチ	47
5. 出土遺物	49
6. まとめ	52

【挿 図 目 次】

第1章 蒲生郡日野町宮ノ前遺跡

第1図	遺跡周辺図	3
第2図	調査区域図	5
第3図	遺構配図	6～7
第4図	南壁断面実測図(1)	6～7
第5図	南壁断面実測図(2)	6～7
第6図	S B-1・S B-101 実測図	8
第7図	S B-102・S B-103実測図	9
第8図	溝跡断面実測図	10
第9図	和同開塚拓影	15
第10図	和同開塚X線透過写真(80KV-3MIN)	16
第11図	接合前の和同開塚	16
第12図	和同開塚の保存処理作業	16
第13図	蓋光X線分析法による和同開塚の分析結果	17
第14図	銅鉢の種類と錫・鉛の相対比の分布	17
第15図	溝跡方位図(1)	19
第16図	溝跡方位図(2)	19
第17図	和同開塚出土遺跡位置図	24

第2章 蒲生郡蒲生町外広遺跡

第1図	外広遺跡の位置と周辺の遺跡	31
第2図	外広遺跡トレンチ配置図	33
第3図	トレンチ土層柱状図	35
第4図	A-3・A-4 トレンチ実測図	36
第5図	B-6 トレンチ実測図	36
第6図	S B0601、02実測図	37

第3章 野瀬遺跡

第1図	野瀬遺跡の位置と周辺の遺跡	41
第2図	野瀬遺跡調査トレンチ配置図	43
第3図	第1～第3 トレンチ実測図	45～47
第4図	S B0101・S K0101	48
第5図	第4 トレンチ実測図	48
第6図	S D0101出土遺物	51
第7図	出土遺物	51

【図 版 目 次】

第1章 蒲生郡日野町宮ノ前遺跡

巻頭カラー図版 和同開珎

- | | |
|----------------|---|
| 図版一 | 1. 遺跡遠景(南東より)
2. 試掘風景 |
| 図版二 | 1. 中央部調査後(北より)
2. 中央部調査後(南より) |
| 図版三 | 1. 西方部調査後(東より)
2. 東方部調査後(西より) |
| 図版四 | 1. SB-1(北西より)
2. SB-1カマド(南より) |
| 図版五 | 1. SB-101(西より)
2. SB-101柱根(Pit15)(北より) |
| 図版六 | 1. SB-102(西より)
2. SD-8(北より) |
| 図版七 | 1. SB-1土器出土状況
2. SD-11土器出土状況 |
| 図版八 | 1. 和同開珎出土状況
2. 和同開珎出土層序 |
| 図版九 | 宮ノ前遺跡出土遺物 |
| 図版十 | 宮ノ前遺跡出土遺物 |
| 図版十一 | 宮ノ前遺跡出土遺物 |
| 図版十二 | 宮ノ前遺跡出土遺物 |
| 図版十三 | 宮ノ前遺跡出土遺物 |
| 図版十四 | 宮ノ前遺跡出土遺物 |
| 図版十五 | 宮ノ前遺跡出土遺物 |
| 図版十六 | 宮ノ前遺跡出土遺物 |
| 図版十七 | 宮ノ前遺跡出土遺物 |
| 図版十八 | 宮ノ前遺跡出土遺物 |
| 図版十九 | 宮ノ前遺跡出土遺物実測図 |
| 図版二十 | 宮ノ前遺跡出土遺物実測図 |
| 図版二十一 | 宮ノ前遺跡出土遺物実測図 |
| 図版二十二 | 宮ノ前遺跡出土遺物実測図 |
| 第2章 蒲生郡蒲生町外広遺跡 | |
| 図版一 | 1. 調査地遠景(南から) 2. A地区調査状況 |
| 図版二 | 3. A・4トレンチ溝検出状況 4. B・3トレンチ全景(西から) |
| 図版三 | 5. B・6トレンチ全景(東から) 6. B・6トレンチSD0601 |
| 図版四 | 7. B・6トレンチSB0601 8. B・6トレンチSB0602、SD0602 |

第3章 蒲生郡蒲生町野瀬遺跡

- 図版一 1.調査地遠景(西から) 2.第1トレンチ全景(東から)
- 図版二 3.第1トレンチ S D0101 4.第1トレンチ S D0102
- 図版三 5.第1トレンチ S D0101、S K0101 6.第2トレンチ全景(東から)
- 図版四 7.第3トレンチ全景(南から) 8.第4トレンチ全景(東から)
- 図版五 野瀬遺跡出土遺物

【表 目 次】

第1章 宮ノ前遺跡

第1表	溝跡観察表	7
第2表	滋賀県下における和同開珎出土遺跡一覧表	21

第 1 章

みや の まえ
蒲生郡日野町宮ノ前遺跡

1. はじめに

本調査は、滋賀県が実施する昭和59年度県営工場整備事業（必作地区石原工区）に伴い実施したものである。当遺跡は昭和58年度に実施した町内遺跡分布調査により新たに発見された遺跡である。「宮ノ前」の遺跡名は小字名から命名したものであるが、宮ノ前の名は隣接する竹田神社に由来すると考えられる。竹田神社は『近江蒲生郡志』によると、寛仁元年（1017）に現在の地に移ったと記され、それまでは日野川左岸増田橋の下流約200mの小字竹田神社に鎮座していたとある。^{〔1〕}現在そこには「明神森之跡」の石碑が建てられている。

宮ノ前遺跡は分布調査の結果、集落跡と想定されるが、遺跡の範囲・性格等は明らかではなく、工事実施前に試掘調査を行い遺跡の保存策を講じることにした。

調査は、排水路予定地にトレンチを8ヶ所設定し、造構・遺物の検出された1～5Tを幅約6m、長さ約154mにわたり拡張した。また、トレンチの中央部では北側に一部拡張した。この結果、調査面積は約1200m²となった。

発掘調査の期間は昭和59年6月から昭和60年3月までとし、現地調査は昭和59年9月に完了した。調査は文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算（2,220,000円）の再配当をうけ、財團法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。現地調査および整理・報告は日野町教育委員会へ依頼し、社会教育係技師日永伊久男が担当した。調査の体制は以下の通りである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財團法人滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会文化財保護課 主査 田中勝弘、技師 葛野泰樹、同 田路正幸

調査担当 日野町教育委員会 技師 日永伊久男

調査補助員 足立泰子、荒竹 陽、奥村ふみ子、河合克彦、川島秀樹、熊捕恵美子、外池美智子、福岡秀夫、福永 勤、福原みゆき、堀 耕次、元持 修、山本典之

また、現地調査において、地元日野町役場をはじめ石原の方々にお世話になった。遺物写真については寿福 滋、和同開珎の保存処理に関しては滋賀県埋蔵文化財センター嘱託調査員中川正人の協力を得た。

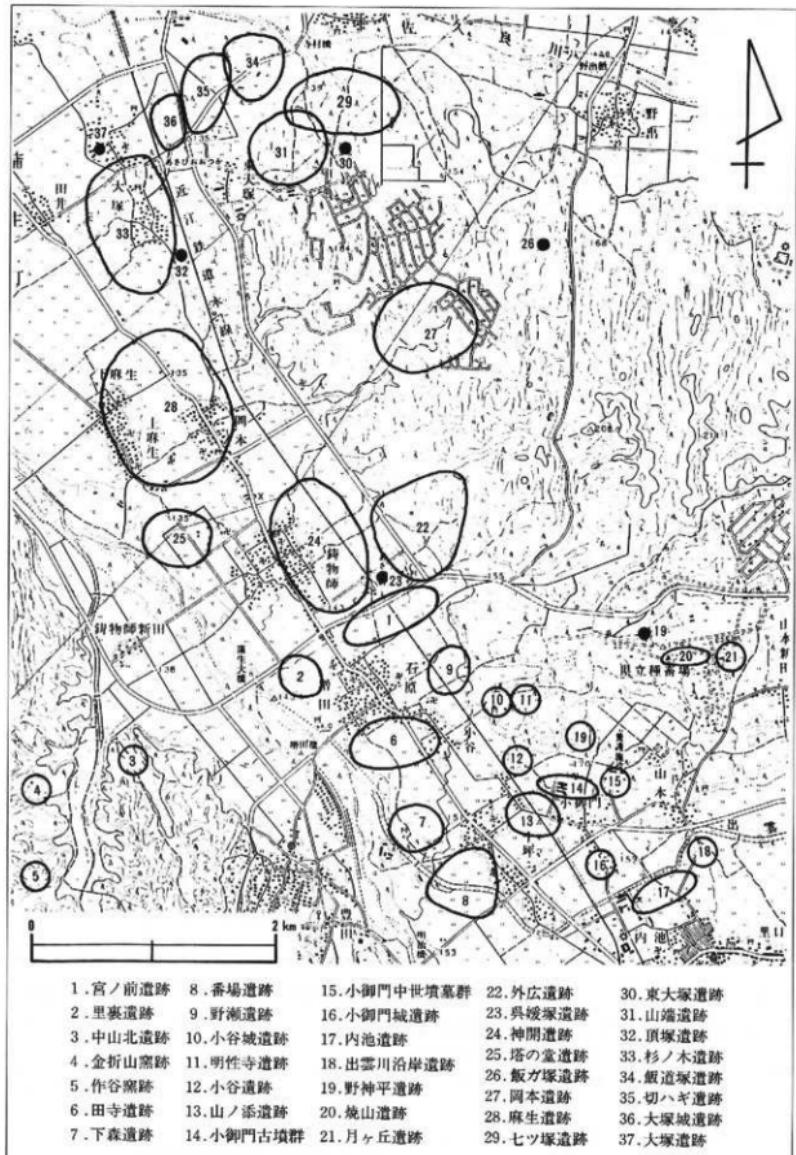
本文の作成にあたり、図面・遺物の整理には熊捕、奥村、足立の尽力があった。本文の執筆は1：葛野泰樹、日永伊久男、2～4・6：日永伊久男、5：中川正人があたり、編集は日永があつた。

2. 位置と環境

湖東平野を形成する一河川である日野川は日野町東端に位置する鈴鹿山系の高峰綿向山を源とし、隣接する蒲生町をへて琵琶湖へと流入する。日野川とそのいくつかの支流により鈴鹿山系西側は分断され200~300m級の舌状丘陵となり、河川流域には沖積平野が形成されている。本遺跡は、北東に日野丘陵、南西に水口丘陵がせまる幅約1.5kmの沖積平野上に位置する。標高はおよそ145mである。

本遺跡周辺の歴史をたどってみると、最古のものとして内池遺跡があげられる。ここは以前より縄文時代から弥生時代にかけての遺物が採集されており、同時期の集落跡が存在すると考えられていた^{注2}。事実、昭和56年度から57年度にかけて実施された県営は場整備事業の事前調査では、弥生時代から鎌倉時代の遺構が検出されている^{注3}。そして同時に弥生時代の方形周溝墓5基の発見により、付近一帯を支配していた権力者が存在していたことも判明した。古墳時代では、小御門古墳群・飯道塚遺跡の古墳群をはじめ、小谷遺跡・飯ヶ塚遺跡・東大塚遺跡・大塚遺跡・頂塚遺跡・呉媛塚遺跡等の円墳が多く認められる。特に小御門古墳群と飯道塚遺跡では、主体部が木棺直葬の家族墓的性格の強い古墳群という点で共通する^{注4}。そして、小御門古墳群から見下せる平地には前述の内池遺跡があり、同時期の竪穴住居跡14棟が発見されていることから、墓域と居住域として両遺跡の関連性が注目される。白鳳時代の遺跡としては、須恵器窯跡3基が発見された岡本遺跡^{注5}があり、当地域の須恵器生産を考える上で欠かせないものである。奈良時代以降になると、この付近の平野にはかなりの集落が形成されていたようである。下森・田寺・里裏・野瀬・外広・山端・切ハギ・杉ノ木・麻生の各遺跡がそれである。これらの遺跡はいずれも日野川及びその支流である佐久良川の河岸段丘上に位置している。また、この頃になると集落の形成と共に窯業がさかんとなり、金折山窯跡^{注6}・作谷窯跡等で須恵器・綠釉陶器・瓦が生産されている。特に金折山・作谷両窯跡が所在する水口丘陵は水口町の春日山の神・峰道両古窯跡^{注7}と共に綠釉陶器の大生産地であったことが窺われる。そして杉ノ木・麻生両遺跡では、水晶の加工も行なわれていたようである。平安時代末期か鎌倉時代初期になると当地域は守護佐々木氏の被官である蒲生氏の支配下に治められる。蒲生氏との関連は明確でないが、小御門城遺跡^{注8}や小谷城遺跡がある。この他にも、土塁や井戸^{注9}が残存し屋敷跡か寺院跡と目される野神平遺跡・口山遺跡等もある。また、小御門中世墳墓群^{注10}のように武士や豪農のものと思われる墳墓も認められる。

以上、本遺跡周辺の地理的・歴史的背景を述べてきたが、狭小な地形にもかかわらず、古代から生活の場として注目されてきたことがわかるであろう。特に、奈良時代以降の集落の形成には目をみはるものがある。



第1図 遺跡周辺図

3. 遺構

今回の調査では、現水田面下約25~65cmで遺構面が検出され、耕土を含め2層から最大7層の堆積が認められている。遺構面は青灰色系ないしは黄褐色系の粘土から成る地山であるが、一部では黒褐色粘質土の遺物包含層にも及んでいる。この包含層は厚さ30cm以上にもなる部分がある。そして、遺構面の上層にも黄灰褐色粘質土・淡灰茶褐色砂質土・黒灰色粘質土の遺物包含層3層が堆積している。この3層はいずれも20cm前後の厚さである。

調査の結果検出された遺構は、竪穴住居跡1棟（S B-1）・掘立柱建物跡3棟（S B-101~103）・溝跡28条（S D-1~28）・上塙8基（S K-1~8）である。以下各々について述べる。

1) 竪穴住居跡（S B-1）

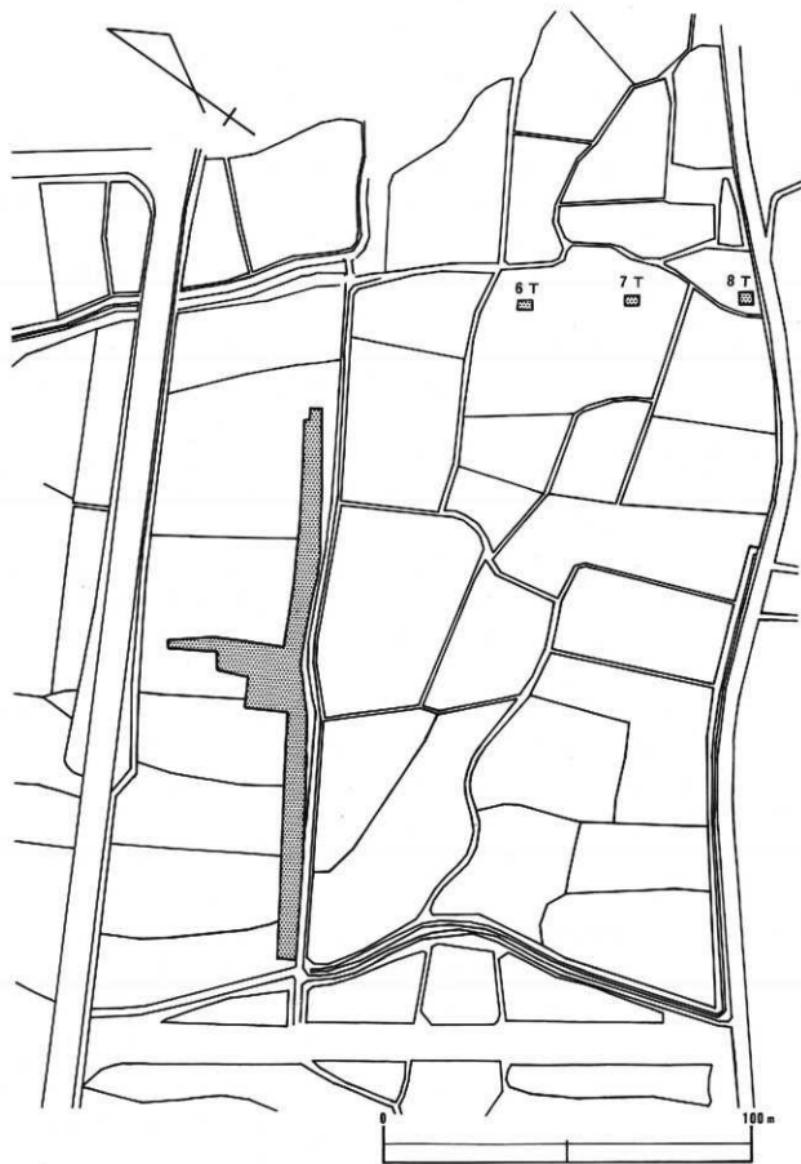
排水路敷より北方に拡張した部分で検出されたものである。一辺約4.5mの隅丸方形のプランをもち各辺がおよそ東西南北に対応するような方位をとる。壁の残存状況は悪く、良く残っている所でも約13cmである。壁溝は東北隅にわずかながら検出され、幅約15cm、深さ約4cmを測る。北辺中央部には住居跡外へ延びる煙出しを備えたカマド施設がある。カマドの壁体部は認められなかつたが、直径約40cmの範囲に焼土が検出され、それをとりまくように炭や灰が散乱している。そして、カマドの中央部には甕などの土器を支えるためのものらしき石が1個残存していた。また南東隅には、長径約90cm、短径約60cm、深さ約15cmの貯蔵穴が備えられている。上部構造を支える柱穴は確認できなかつた。

2) 掘立柱建物跡（S B-101~103）

S B-101は竪穴住居跡と重複して検出されたもので、2間×2間の規模をもつ。各柱列の長さは約3.2~3.3mで、西柱列の2ヶ所で残存していた柱根によると柱間寸法は1.65mとなる。柱穴の掘方には最大で径約60cmを測る。柱の直径は柱根より約20cmであることがわかる。建物方位は西柱列によると北で約6度東へ振れている。

S B-102は建物としてはかなり無理があるかもしれないが、一応掘立柱建物跡と考えておく。2間×3間の南北棟で総柱建物が想定される。柱穴の配置が不規則であるため規模や柱間寸法を一概には言えないが、比較的の整然と並ぶ中央柱列では、柱列長約4.6m、柱間寸法1.5m前後となっている。柱穴はおむね径約30~45cmの円形である。中央柱列の方位は北で約30度東へ振れている。

S B-103は調査区域の東端近くで検出された。2間×3間の総柱建物跡である。規模は東西約4.5m、南北約3.4mである。柱間寸法は約1.5~2.0mとかなりのばらつきがある。柱穴の直径は約25~35cmである。建物方位は北で西へ58度振る。



第2図 調査区域図

3) 溝 跡 (SD-1~28)

今回の調査で検出された遺構の大半を占め総数28条にも及ぶ。各々の溝跡については第1表の観察表にゆずり、ここでは主要な溝跡のみを述べることにする。

SD-8は、調査区域を横断する状態で約6.5m検出され、幅約175cm、深さ約68cmを測る。溝の西側では肩部より約40cmの深さで幅約70cmの平坦面があり、二段掘りになっている。そのため、底幅は約35cmと狭い。埋土はこの平坦面を境として、上層は黒褐色粘質土、下層は黒灰色粘質土となっている。方位はN-31°-Wである。

SD-10は約33.4m検出され、最長のものである。幅約50cm、深さ約10cmあまり規模の大きなものではない。埋土には黄灰褐色粘質土・灰褐色砂質土・暗茶褐色粘質土の3層認められるが、部分によりその堆積状況は異なる。方位はやや東方に弯曲するが、おおむねN-5°-Wとなる。

SD-11はSD-10と切り合っており、南側が開いたコの字状に検出された。長さは総延長約22.5m、幅約40cm、深さ約10cmである。埋土は単純層であるが、暗茶褐色粘質土と灰褐色砂質土の部分がある。方位は東側でN-8°-Eである。

SD-13はSD-10より派生したものである。長さ約10.9m・幅約20~70cm・深さ約12cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。方位は南側に若干弯曲するがおおよそN-85°-Wである。

SD-14は弧状に弯曲したもので、約8.0m検出された。幅約2.5m・深さ約28cmを測る。埋土は黒褐色粘質土の単純層である。

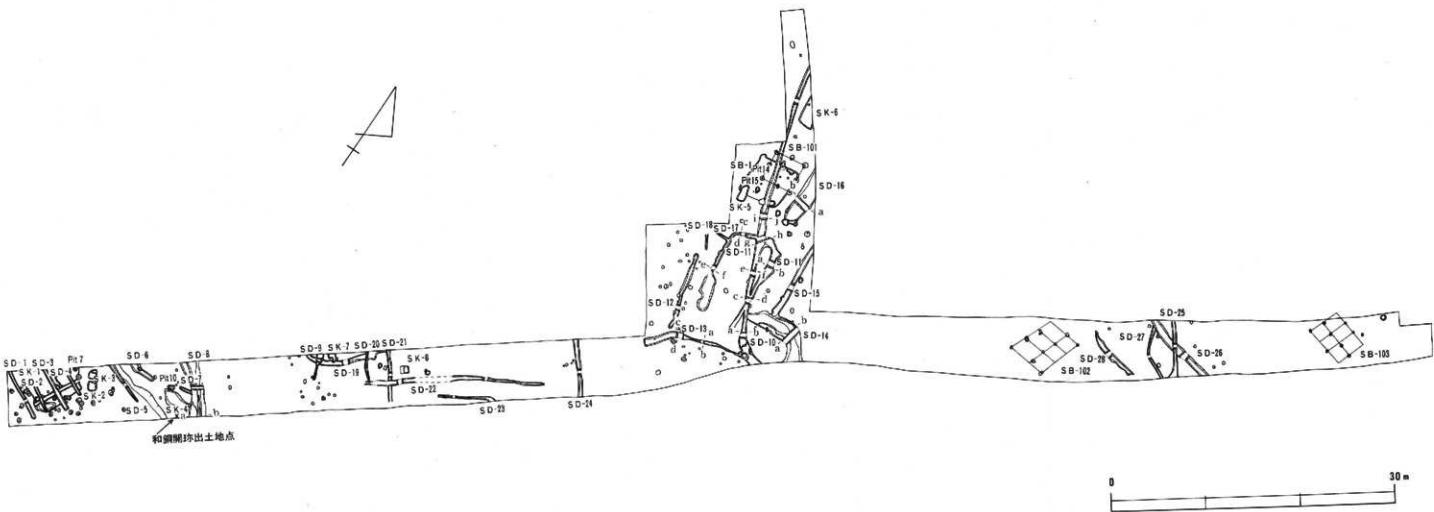
SD-16は検出長約6.4m、幅約2.0m、深さ約27cmを測る。埋土は2層で、上層が灰褐色粘質土、下層が暗茶褐色粘質土となっている。この2層はいずれも若干の炭を含むものである。

4) 土 塙 (SK-1~8)

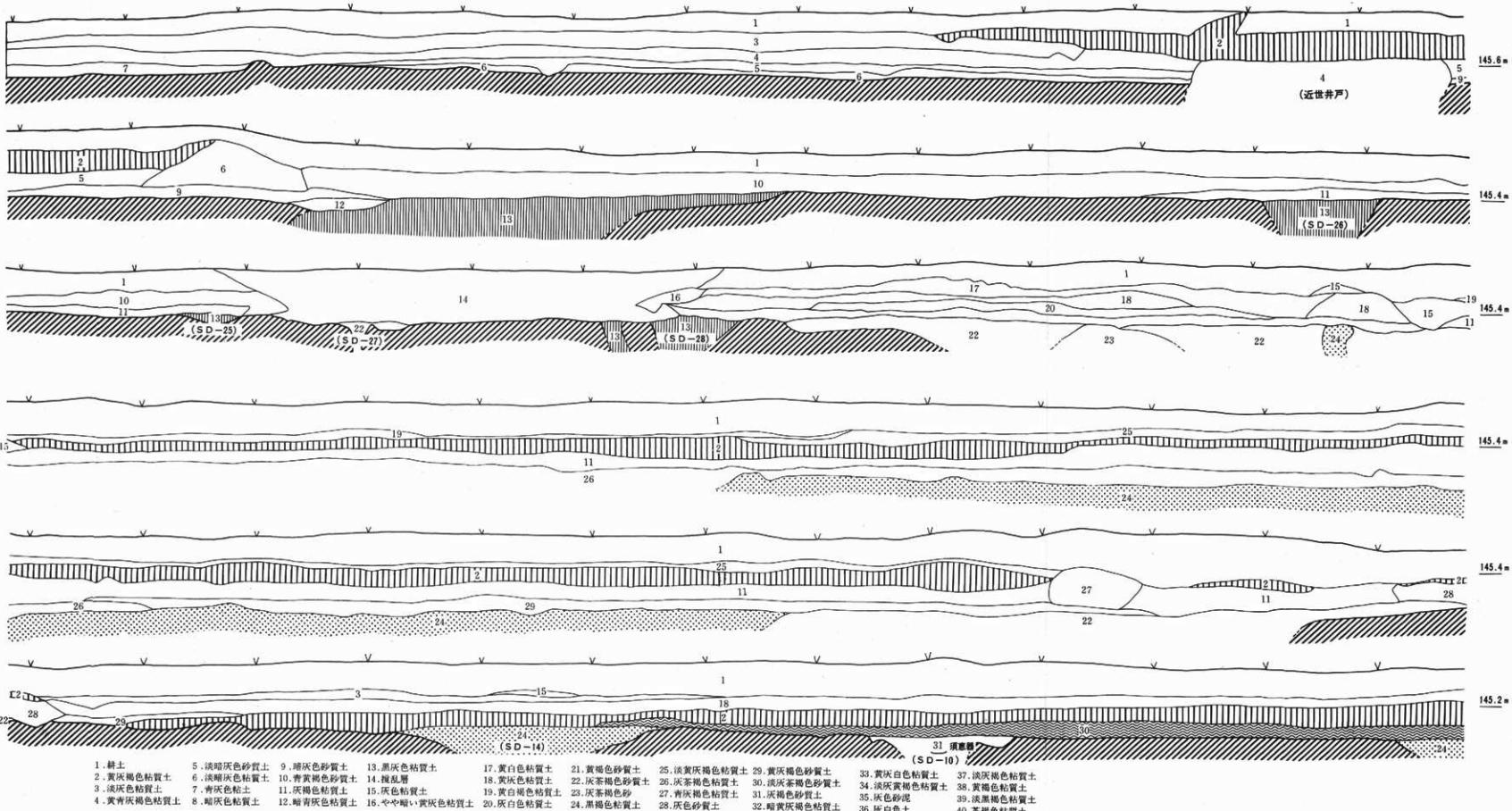
合計8基の土塙が検出されたが、主なものを次に述べる。

SK-1は一辺5.5m以上の不整形のプランをもち、深さは約15cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

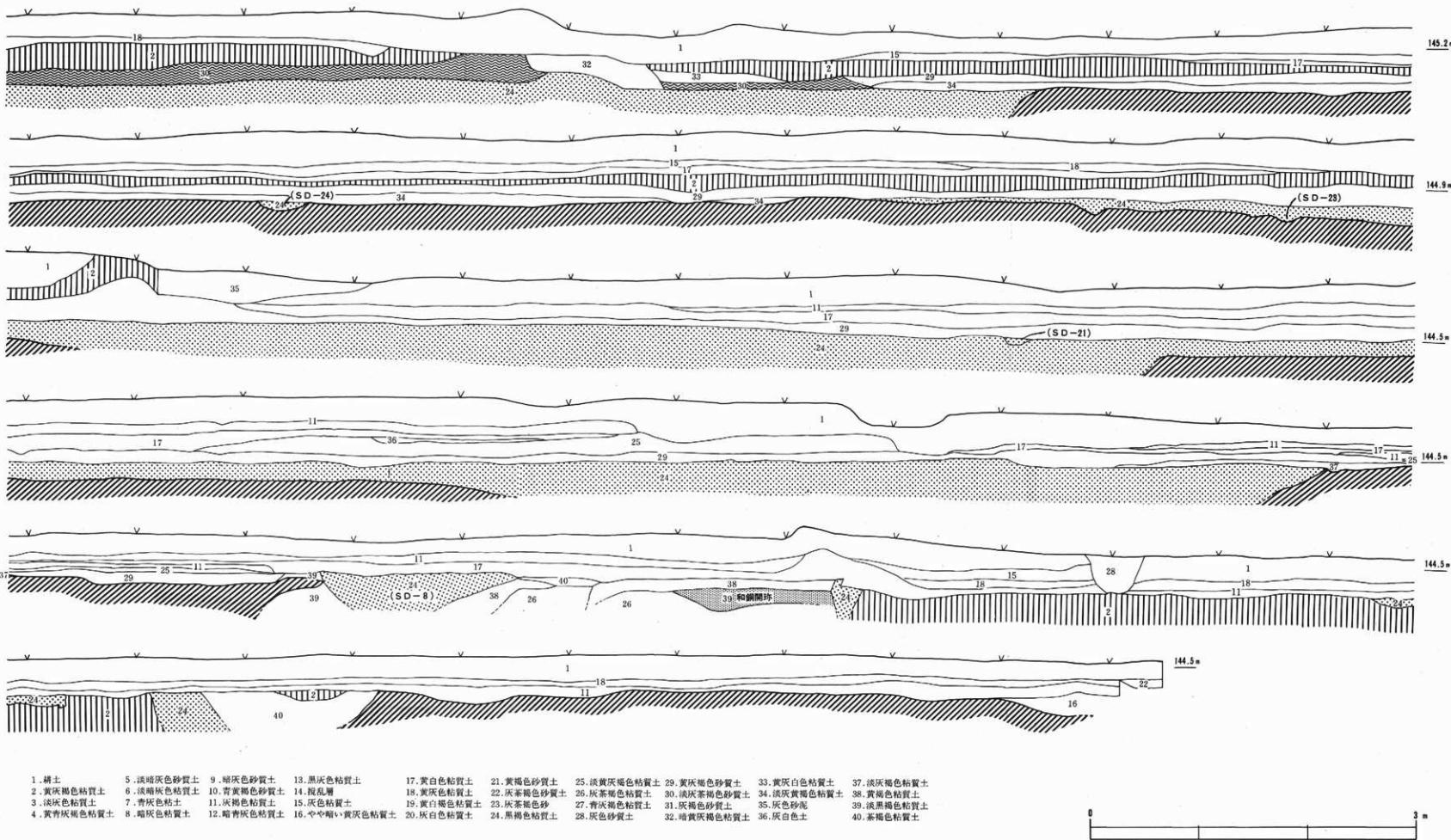
SK-6は、その南端が検出されただけであるが、約1.6m×3.0m以上の長方形になると思われる。深さは約10cmと浅い。埋土は暗灰褐色粘質土である。SD-16のような溝跡になる可能性もある。



第3図 遺構配置図



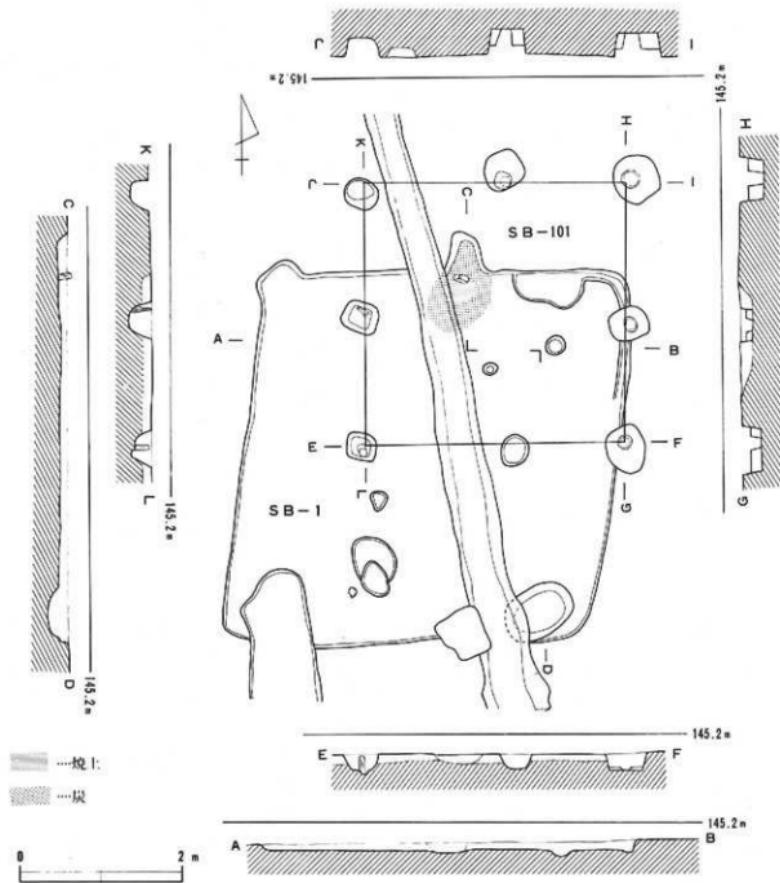
第4図 南壁断面実測図(1)



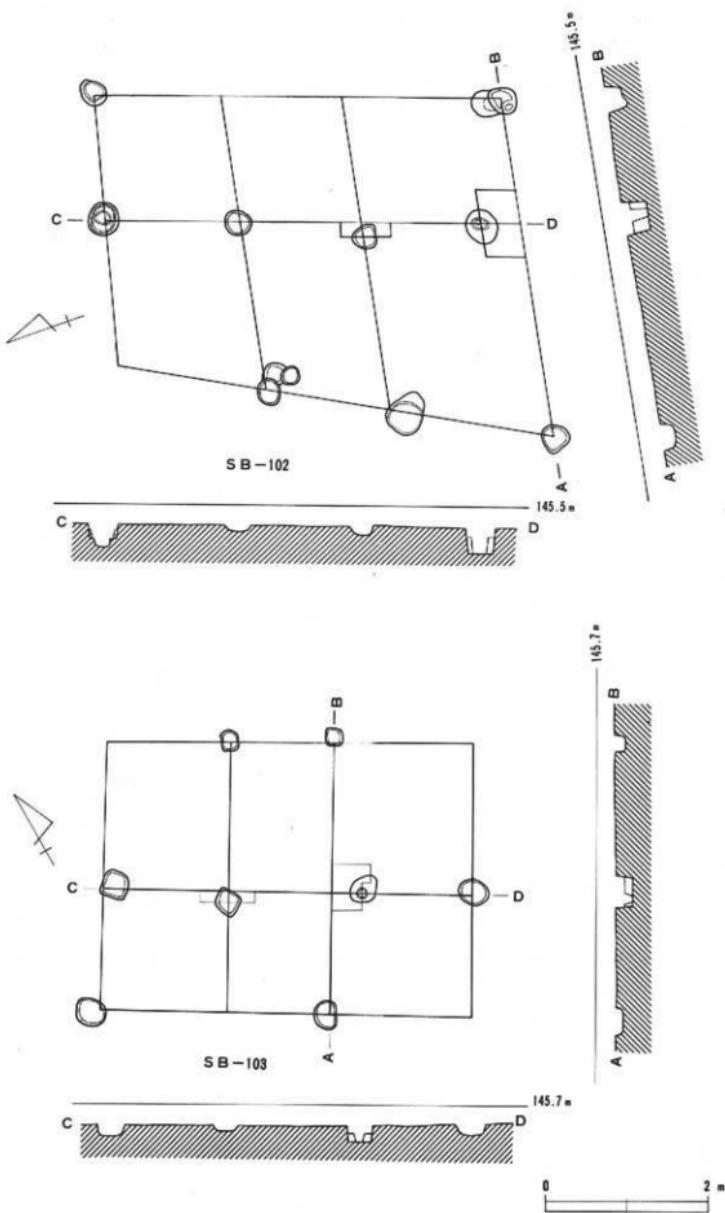
第5図 南壁断面実測図(2)

第1表 溝跡観察表

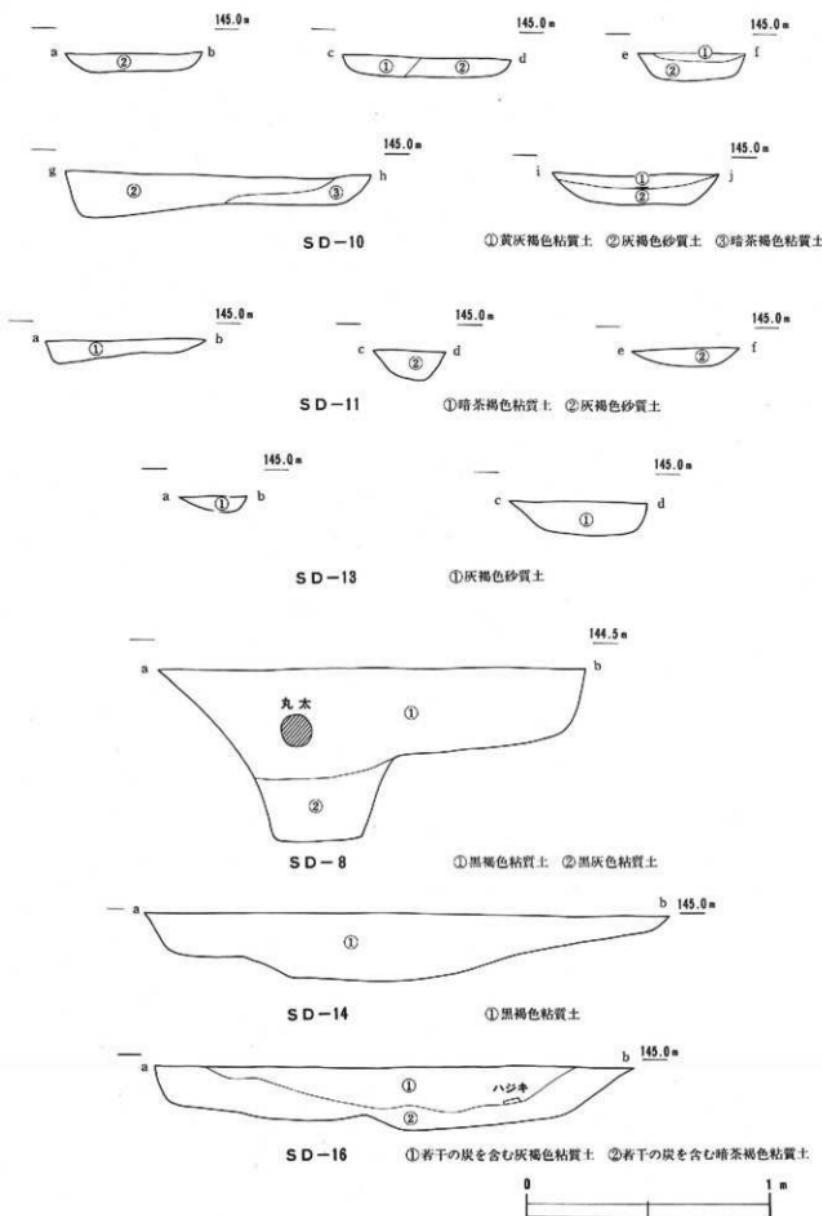
造構名	検出長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	max	方 位	埋 土	備 考
SD-1	約 5.8	約 45	約 4		N-51°-W	灰褐色粘質土	
SD-2	約 3.3	約 40	約 3		N-49°-W	灰褐色粘質土	
SD-3	約 5.2	約 50	約 8		N-52°-W	灰褐色粘質土	
SD-4	約 3.5	約 40	約 3		N-54°-W	灰褐色粘質土	
SD-5	約 5.2	約 50	約 9		N-58°-W	灰褐色粘質土	
SD-6	約 3.0	約 70	約 8		N-79°-W	黑褐色粘質土	
SD-7	約 1.5	約 25	約 9		N-90°-W	黑褐色粘質土	
SD-8	約 6.5	約 175	約 68		N-31°-W	上層 黑褐色粘質土 下層 黑灰色粘質土	丸太
SD-9	約 2.9	約 75	約 4		N-8°-W	黑褐色粘質土	
SD-10	約 33.4	約 50	約 10		N-5°-W	黄灰褐色粘質土ないし 灰褐色砂質土ないし 暗茶褐色粘質土	円面硯
SD-11	約 22.5	約 40	約 10		N-8°-E	灰褐色砂質土ないし 暗茶褐色粘質土	
SD-12	約 8.6	約 50	約 6		N-0°-W	暗茶褐色粘質土	コの字状に屈曲
SD-13	約 10.9	約 20~70	約 12		N-85°-W	灰褐色砂質土	
SD-14	約 8.0	約 250	約 28			黑褐色粘質土	SD-10より派生
SD-15	約 8.7	約 85	約 4		N-7°-E	黑褐色粘質土	弧状に湾曲
SD-16	約 6.4	約 200	約 27		N-15°-E	上層 若干の炭を含む 灰褐色粘質土 下層 若干の炭を含む 暗茶褐色粘質土	
SD-17	約 4.0	約 30	約 4		N-80°-W	黑褐色粘質土	
SD-18	約 1.7	約 20	約 5		N-20°-W	黑褐色粘質土	
SD-19	約 8.5	約 55	約 10			黑褐色粘質土	
SD-20	約 3.4	約 25	約 7		N-20°-W	黑褐色粘質土	
SD-21	約 6.2	約 35	約 7		N-24°-W	黑褐色粘質土	
SD-22	約 3.8	約 60	約 15		N-64°-E	黑褐色粘質土	途中2度途切れる
SD-23	約 6.4	約 45	約 4		N-72°-E	黑褐色粘質土	
SD-24	約 6.2	約 60	約 6		N-28°-W	黑褐色粘質土	
SD-25	約 6.0	約 45	約 16		N-25°-W	黑灰色粘質土	
SD-26	約 8.5	約 90	約 11		N-69°-W	黑灰色粘質土	
SD-27	約 6.1	約 30	約 9			灰茶褐色砂質土	コの字状に屈曲
SD-28	約 7.0	約 55	約 15		N-69°-W	黑灰色粘質土	



第6図 SB-1・SB-101実測図



第7図 SB-102・SB-103実測図



第8図 溝跡断面実測図

4. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ12箱分の須恵器・土師器・褐色土器・瓦器・陶器・磁器等の土器と瓦・木製品・錢貨等である。これらのほとんどが須恵器で包含層より出土したものである。

1) 土 器

ここでは出土した遺構ごとに述べていくことにする。

S B - 1 C 1・C 2は須恵器の杯蓋と杯のセットである。C 1は天井部が比較的高く、口縁端部内側には段のなごりが認められる。C 2のたちあがりは受部より高くわりとしっかりしている。底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。土師器 E 1は頸部から肩部にかけての破片であるが、球形の体部と直線的に開く口縁部をもつ長頸壺であろう。

S D - 6 須恵器の杯B蓋^(C 3)と杯B^(C 4)が出土している。C 3は口縁部の小破片である。口縁部は屈曲せず、笠形の天井部に扁平なつまみがつくものと思われる。C 4は高台部分の破片で底部外端に断面方形の高台が貼付けられている。高台はあんまりふんばらず、全体で接地している。体部と底部とは棱をなさない。体部から底部にかけての外面に自然釉が認められる。

S D - 8 C 5・C 6はともに須恵器杯Bの小破片で、平坦な底部から体部が内窵しつたちはがる器形である。いずれも、高台は底部外端に貼付けられるが、前者は断面がややつぶれた方形で内端で接地するのに対して、後者は断面方形で全体で接地する。

S D - 10 灰褐色砂質土層より須恵器の杯(C 7～C 9)と土師器の甕(E 2)が出土している。杯A IVのC 7はほぼ平坦な底部と直線的に外上方に開く口縁部をもつ。底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。C 8は杯B IVで、底部外端に断面三角形に近い高台が貼付けられている。底部は中央部でふくらみ、やもすれば内端で接地する高台より突出するかもしれない。口縁部は外上方に直線的に開く。C 9も杯Bであるが、平坦で厚肉の底部外端よりやや内側に、断面方形の低い高台が貼付けられる。E 2はくの字状に開く口縁部をもつ甕である。口縁部の外面が肥厚し、わずかな棱線となっている。

S D - 11 須恵器の杯蓋(C 10・C 11)・杯(C 12～C 17)・甕(C 18)・円面硯(C 19)がある。C 10・C 11は杯B蓋Ⅲで、浅い笠形の天井部と屈曲しない口縁部をもつ。C 10は口縁部が外方に肥厚し垂下しており、天井部の外面は回転ヘラ削り調整で内面はナデ調整される。C 11は口縁部が肥厚せず外窵気味に垂下し、内外面ともロクロナデ調整である。C 12は、ほぼ平坦な底部と直線的に外上方へ開く口縁部をもつ杯B IVである。底部外面には回転ヘラ切り痕が認められる。C 13～C 17は、いずれも直線的に開く口縁部と平坦な底部の外端付近に高台が貼付けられる器形であるが、口径により杯B II(C 16・C 17)と杯B IV(C 13～C 15)に分類される。高台には外端

が肥厚し断面がL字状になり内端で接地するもの（C14・C15）、断面が方形に近く全体で接地するもの（C13・C16）、内湾するもの（C17）がある。底部外面は、中央部が残るものを見る限り回転ヘラ切り痕が認められる。C18はほとんど肩のはらない斐で、外湾しつつ聞く口縁部の端部は外傾する平面となる。体部外面にはカキ目が施され、内面には同心円文のあて板压痕が残る。C19は脚部に方形の透しを12孔配する圓足円面硯である。平坦な陸部と半円形の海部は明瞭に区分される。外堤部は陸部より若干高く、端部は水平面となっている。脚部の上方には1条の凸線がめぐり、下方は肥厚し内端で接地する。海部は使用のため摩滅しており、脚部にかけて黒墨が付着している。

S D-13 須恵器の杯蓋（C20～C22）・杯（C23～C28）と土師器の斐（E3）が出上している。杯蓋はいずれも笠形の天井部に扁平なつまみを有するもので、口径により杯B蓋III（C20・C21）と杯B蓋V（C22）に分類できる。ただしC20については、口縁部の弯曲が他の2点と比較して強く、若干異なる様相を呈している。調整は外面ともロクロナデであるが、C21の天井部内面だけはナデ調整である。杯は高台の有無で杯A（C23～C27）と杯B（C28）に分類できる。杯Aは口径によりさらに杯AI（C27）と杯AV（C23～C26）に細分できる。器形はともにはば平坦な底部から直線的ないし若干外湾気味に聞く口縁部をもつものである。そして、底部と体部との境には明瞭な稜線をもたない。底部外面は中央部を欠損しているものが多く確定的ではないが、回転ヘラ切り痕が残るものとロクロナデ調整されるものとがある。C28は全体的に厚肉で、底部外端やや内側に高台が貼付けられる。高台は断面方形を呈し内傾して全体で接地する。E3の斐はくの字状をなす口縁部の破片である。口縁部内面及び頭部外面がヨコナデされる以外は斜方向のハケ調整される。

S D-14 須恵器の杯（C29・C30）・小壺（C31）・壺（C32）がある。C29・C30はいずれも外湾しつつ内傾する高くてしっかりしたたちあがりをもつ口縁部の破片である。C31は口縁部を欠損している。肩部はよく張り1条の沈線をもつ。底部は平らでヘラ削り調整されている。C32は扁平な球形の体部とひきしまった頭部から外湾しつつ大きく聞く口縁部をもつ。底部は厚肉の丸底で、体部下半にかけて回転ヘラ削りが施されている。頭部に1条と、体部最大径位置の上下に2条の沈線がめぐる。体部には径1.5cmの円孔が開けられている。

S D-16 若干の炭を含む暗茶褐色粘質土層より、須恵器の杯蓋（C33～C35）・杯（C36・C37）・長頸壺（C38）及び土師器の斐（E4）が出上している。C33～C35はいずれも笠形の天井部に扁平なつまみを有する杯B蓋IIIである。口縁部は屈曲せず、端部は断面三角形を呈し垂下する。ただし、C34の口縁部は丸くおわっている。天井部外面はロクロナデ調整されている。C36は厚肉の底部から口縁部が直線的に聞く杯AVである。底部外面には回転ヘラ切り痕が認められる。C37は底部が欠損するため高台の有無は不明であるが、C36と同型態のものである。C38は

口頸部と底部を欠損する長頸壺である。肩部は体部の上方%位置にあり、径16.7cmを測り強く張出している。肩部の上位には1条の沈線がめぐる。E 4は内窓しつつ上方に開く口縁部の破片である。端部は平面となり内傾している。

S D - 19 C 39は須恵器杯B蓋IVである。天井部は笠形であるが、口縁部は若干屈曲気味である。端部は丸味を帯び垂下している。

S D - 20 C 40は須恵器鉄鉢の体部から口縁部にかけての破片である。ほぼ直線的にのびる体部と内窓して端部が丸くおわる口縁部をもつ。

S D - 22 平坦な天井部と屈曲する口縁部をもつ須恵器杯B蓋A IVであるC 41の出土をみる。口縁部は一旦上方に屈曲した後、垂直に下方へ下っている。端部は外湾気味である。

S D - 24 須恵器の杯A IVであるC 42は、全体的に薄手のつくりである。平坦な底部から体部は稜線をもってたちあがり、そのまま直線的に開く口縁部に続く。端部は丸くおわっている。底部外面に回転ヘラ切り痕が認められる。

S K - 1 C 43は須恵器の杯で全体的に薄手のつくりである。たちあがりは高く、外窓しつつ内傾している。受部は外上方にのび、端部は丸い。

Pit 7 C 44は須恵器の杯A IVである。底部と体部とは稜線で区分される。口縁部は直線的に外上方に開き、端部は丸くおわる。全体的に厚肉である。

Pit 10 C 45は平坦な天井部と屈曲する口縁部をもつ須恵器の杯B蓋IVである。口縁端部は沈線状の窪みのため、外下方につまみ出された状態を呈する。天井部外面には回転ヘラ切り痕が残る。

黒褐色粘質土層 須恵器の杯蓋（C 46）と甕（C 47）の出土がみられる。C 46はかえりを有するもので、比較的しっかりしたかえりが若干内傾してつけられる。C 47は口頸部が強く外窓して端部が外方に肥厚するものである。

黒灰色粘質土層 底径5.3cmとかなり小型の杯C 48が出土している。平坦な底部から体部が屈曲して外上方にのびる。ただし稜線はなさない。底部外端には断面方形の高台が貼付けられ、全面で接地する。

淡灰茶褐色砂質土層 須恵器の甕C 49の口縁部は直線的に外上方に開いた後上方に屈曲する。端部は外方に肥厚し、内傾する面をなす。C 50は脚部に8孔の長方形透しを有する圓足円面鏡である。陸部は平坦で外周にわずかな凸線がめぐる。外堀部は欠損する。脚部において透しの上下には各1条の凸線がめぐる。脚端部は外方に肥厚する。

黄灰褐色粘質土層 須恵器の杯蓋（C 51～C 55）、杯（C 56～C 64）、甕（C 65～C 67）、鍋（C 68）、壺（C 69）と綠釉陶器の瓶（G 1）が主な出土遺物である。杯蓋はいずれも天井部外面に扁平なつまみがつくが、天井部が笠形で深く口縁部が屈曲しないもの（C 53～C 55）、天井部が平坦で浅く口縁部が屈曲するもの（C 51）、及びその中間形態、すなわち天井部は平坦であるが口縁部が屈

曲しないもの（C52）がある。これらの内外面はロクロナデ調整されているが、天井部内面だけナデ調整されるもの（C52・C55）がある。杯にはたちあがりを有するもの（C56）、無高台のもの（C57）、有高台のもの（C58～C64）がある。C56は全体的に厚手のつくりで、断面三角形の分厚いたちあがりをもつ。C57はほぼ平坦な底部から体部が屈曲してのび、口縁部もそのまま直線的に開く。底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。有高台の杯はいずれも底部と体部が稜線をして屈曲するものではない。高台は断面がほぼ方形で、底部外端に貼付けられるもの（C58～C60・C62・C63）と外端やや内側にあるもの（C61・C64）とがある。そして高台は全体で接地（C59・C60・C61）していたり、内端で接地（C58・C62～C64）していたりする。C61は底径が6.0cmと小型品である。斐は口縁部の破片ばかりである。C65は直線的に外上方に開き、端部は内傾する平面となる。C66はやや外弯し、端部は外傾する平面となる。C67は強く外弯し端面は外方を向く平面となり下端がわずかに垂下している。鍋C68は平底で、わずかに外上方へ折曲げられた把手が貼付けられる。C69は壺の高台部分のみで径4.5cmを測る。高台は高く、外方にしっかりとふんばっている。端部は内外方につまみ出されている。G1は高台脛付部から底部外面以外に緑褐色の釉がかけられる。全体的に厚肉で、高台も重量感がある。底部内面には1条の沈線がめぐる。軟陶である。

淡黒褐色粘質土の土坡状の落込み 土師器の斐（E5）と皿（E6）が出土した。E5はやや扁平な球形の体部とくの字状に屈曲する口頸部をもつ。体部最大径は中位にあり、一对の折曲把手が貼付けられる。調整は磨滅のため不明な部分もあるが、外面は縱位、内面は横位のハケである。E6は平坦な底部から体部が屈曲してのび、肥厚気味の口頸部は若干外弯する。

2) 瓦

丸瓦4点（1・2・4・6）・平瓦2点（3・5）のみである。これらは、黄灰褐色粘質土層（1～3）・淡灰茶褐色砂質土層（4・5）・黒褐色粘質土層（6）よりそれぞれ出土しており、遺構等に伴うものではない。丸瓦・平瓦とともに、凸面は左撚りの繩目叩きにより成形された後端面平行方向にナデ消されている。凹面は無調整で密な布目が残る。側面には分割截面が認められ、丸瓦（2）は凹面側より、平瓦（3）は凸面側より分割截線が入れられている。したがって、平瓦は桶巻作り技法によるものであると判明している。破面はヘラ削りにより調整されている。端面もヘラ削り調整である。

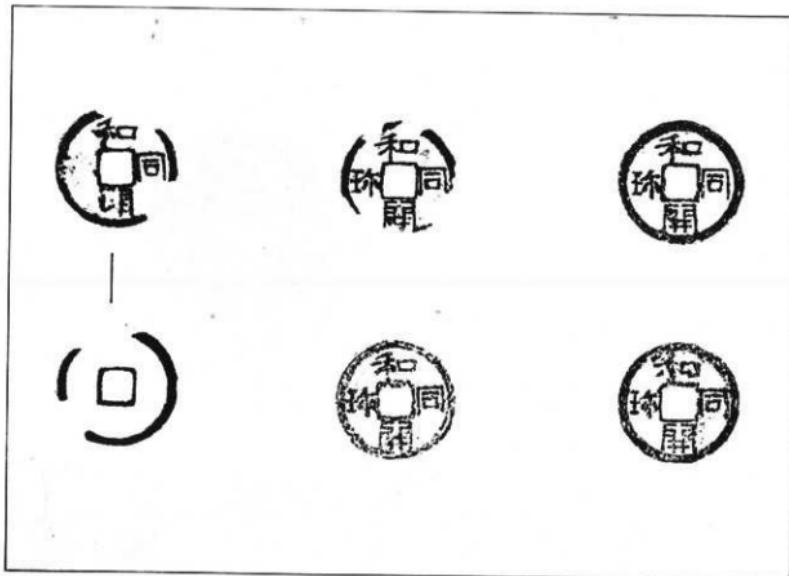
3) 木製品

加工が施されているものは、柱根2点と丸太1点である。柱根は、SB-101の西側柱列の2柱穴（Pit14・Pit15）より出土している。Pit14出土のものは、長さ約48cm、基底部径約11cmである。Pit15出土のものは、長さ約52cm、基底部径約14cmである。これらの基底部は荒く切断された状態のままで、側面も未加工のままである。丸太はSD-8の黒褐色粘質土層より、溝跡の中軸線に

沿う状態で出土した。長さは約2.5mで、径は約10cmである。

4) 銭 貨

和同開珎100点が出土した。これは調査区域西端より約18m東の淡黒褐色粘質土の土壟状の落込みより出土した。土師器の甕（E 5）内に納められていた。この甕は口縁部をほぼ水平にした正位置であった。甕内には和同開珎と共に土師器皿（E 6）の破片も落込んでおり、復元すると甕の口径に相当する大きさとなりおそらく甕の蓋として使用されていたのであろう。和同開珎は当初ひも状のものに通して結ばれていたらしく、数珠つなぎの状態で鋲着していた。鋲着しているためすべてがそうであるとは言いきれないが、これらの和同開珎は標準タイプの新和同と言われる銅錢である。



第9図 和同開珎拓影（実物大）。

5. 宮ノ前遺跡出土の和同開珎の保存処理と材質分析

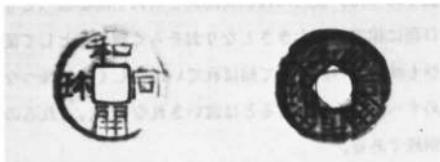
蒲生郡日野町宮ノ前遺跡における発掘調査で、土師質の甕とともに100枚の和同開珎が出土した。これらの和同開珎は埋蔵中に腐食し脆弱化しているため保存処理を実施し、さらに、材質調査として蛍光X線分析を行なった。

1) 和同開珎の現状と保存処理

発掘調査現場での出土状況については本報告書に述べるところであるが、和同開珎100枚が一括していわゆる数珠つなぎの状態で出土しており、埋蔵中の腐食生成物によって各々の銅錢が密着していた。表面は青銅製品の出土遺物の多くに見られる鏽（緑青）で覆われており、内部まで腐食が進行して全体的に脆くなっている。また一連の和同開珎から分離した3点の銅錢は遺存状態が悪く、一部で割れが生じている。

こうした青銅製品の腐食の要因は、埋蔵環境に大きく左右されるが、埋没中の周囲の土壤に含まれる多様な物質（水分や溶存するイオンなど）が青銅と反応することが考えられる。これらの鏽のなかには腐食の進行により遺物を劣化させ崩壊に至る性質のものも見られる。鏽の進行をおさえ、脆弱化した遺物の強化が必要とされ、以下に述べる工程を経て保存処理を実施した。

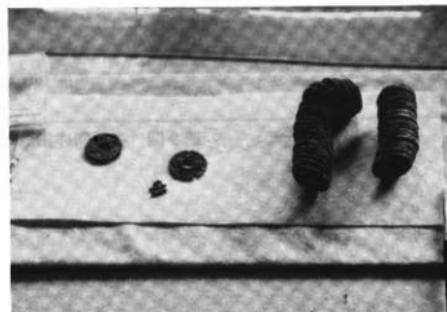
保存処理の方法としては、銅錢と銅錢の間隙に生成した鏽の結晶が強く固着しているため銅錢を損傷することなく分離するのは不可能と思われ、一方埋納状況を維持することが考古学上必要とされた



第10図 和同開珎 X線透過写真 (80KV-3MIN)



第11図 接合前の和同開珎



第12図 和同開珎の保存処理作業

ため現状で保存することとした。土の除去につづく防錆処理を経て遺物の補強、接合を行なうことで資料としての活用に耐えうる処置が望まれた。

事前調査として分離した3点の和同開珎のX線透過写真の撮影を行なった結果、剥がれた一枚の銅銭は細部に渡り亀裂を生じており、強化のための処置が早急に必要だった。一方重なったままの2枚の銅銭はいずれもが和銅開珎であることが再確認できた。(第10図)

青銅製品の防錆処理として近年定着しつつあるベンゾトリアゾール法を今回の和同開珎について適用した。この方法は、ベンゾトリアゾールと呼ばれる薬品を使用し銅や塩化物を固定するもので、处方は5%ベンゾトリアゾールのアルコール溶液中に遺物を浸漬し、処理後表面に残留した薬品を洗浄し乾燥させた。

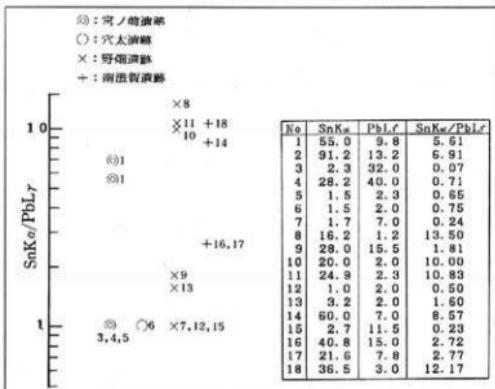
脆弱化した銅銭についてはさら
に強化処理として、アクリル樹脂

(パラロイド・B-72) の5%ト
ルエン溶液を減圧下で含浸させた。

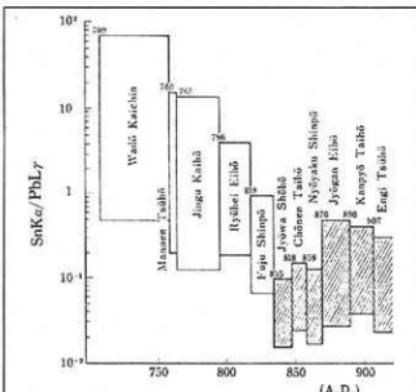
割れが生じ一部で破片となっ
た1点の和同開珎については、強化
後にシアノアクリレート系接着剤
(ポンドアロンアルファ) で接合
した。(第11・12図)

和同開珎の各部位の計測は大半
が一連の固まりとなっているため、
接合を終えた一点についてのみ行
なった。外縁外径は24.95mm、外縁
内径は21.0mm、内郭外径は8.0mm、
内郭内径は6.5mm、外縁厚は1.43mm
を計った。重量は和同開珎100枚の
平均値として3.0gを計測した。

保存処理を終えた遺物といえど
も、全体的に強度が低下し、さら
に腐食の進行も考えられるため取
り扱いや保管に十分な配慮が必要
とされる。



第13図 螢光X線分析法による和銅開珎の分析結果



第14図 銅銭の種別と錫・鉛の相対比の分布
(from M. Sawada, 1979)

2) 銅銭の螢光X線分析

和同開珎の材質を理化学的に分析し、個体間の材質の相違を明らかにする目的で螢光X線による非破壊分析を行なった。分析試料は、宮ノ前遺跡出土の100枚の和同開珎を分離できないため5群に分けそれぞれ試料に供し(No.1～5)、大津市穴太遺跡出土のもの1点(No.6)、同野畠遺跡出土の和同開珎6点(No.7～12)、同遺跡出土隆平永宝(No.13)、同南滋賀遺跡出土和同開珎5点(No.14～18)の計18点である。

分析方法は螢光X線分析法で表面分析とし理学電機製螢光X線分析装置を利用した。X線管球の対陰極にタングステンを使用し、分光結晶は沸化リチウム(LiF)を使用している。なお測定条件は、印加電圧:40kV、電流:20mAとし、分析の対象とした元素は、錫(SnK α -I)、鉛(PbL β -I)、銅(CuK γ -II)でそれぞれX線の相対的な強度を求めるとした。

分析結果として第13図に示す。各試料の材質の相違を求める手法として錫と鉛の相対的X線強度の比が、錫に覆われた青銅製品の材質を反映していることが知られている。今回の分析結果のまとめ方としてこの分析手法を適用している。この分析手法による銅銭の分析例として第14図に示す。鑄造もしくは流通年代と銅銭の種別ごとにみた錫(SnK α -I)、鉛(PbL β -I)の相対比であり、時代が下るほど鉛の量が増えそれに対して錫の減少がみられる。

今回の分析結果は第14図中にみられる和同開珎の成分比の範囲内にある。今後他の種類の皇朝十二銭の分析を進めるとともに、和同開珎はとくに長期に渡って鑄造され使用されたために銭文の型式分類などと分析値との相互の比較検討が望まれる。なお、銅・錫・鉛の主成分の他に不純物として、銀・ビスマス・鉄・ヒ素などが含まれている。

3) まとめ

和同開珎が広く国内に流通して行った歴史的背景のもとに、発掘調査によって多くの出土例が知られている。遺跡の立地や環境によりこれら青銅製品の状態は多様であり、中には最近まで流通していた様な遺存度を呈するものもみられ興味深い。劣化した遺物に対しては適切な保存処理を実施するとともに、材質調査を積極的に進め技法的な考察なども研究してゆく必要がある。今回報告した和同開珎の保存処理と材質分析について適宣指導を受けた、奈良国立文化財研究所遺物処理研究室・沢田正昭室長・同秋山隆保技官・また分析試料を提供して頂いた方々に文末ながら謝意を表する次第である。

(参考文献)

沢田正昭・秋山隆保「考古遺物の保存法」『考古学と自然科学』第11号(1978)

奈良国立文化財研究所「銅銭の螢光X線分析」『平城宮発掘調査報告VI』(昭和46年)

Masaaki Sawada, Non-Destructive Analysis of Bronze Objects, International Symposium on the Conservation of Cultural Property(1978)

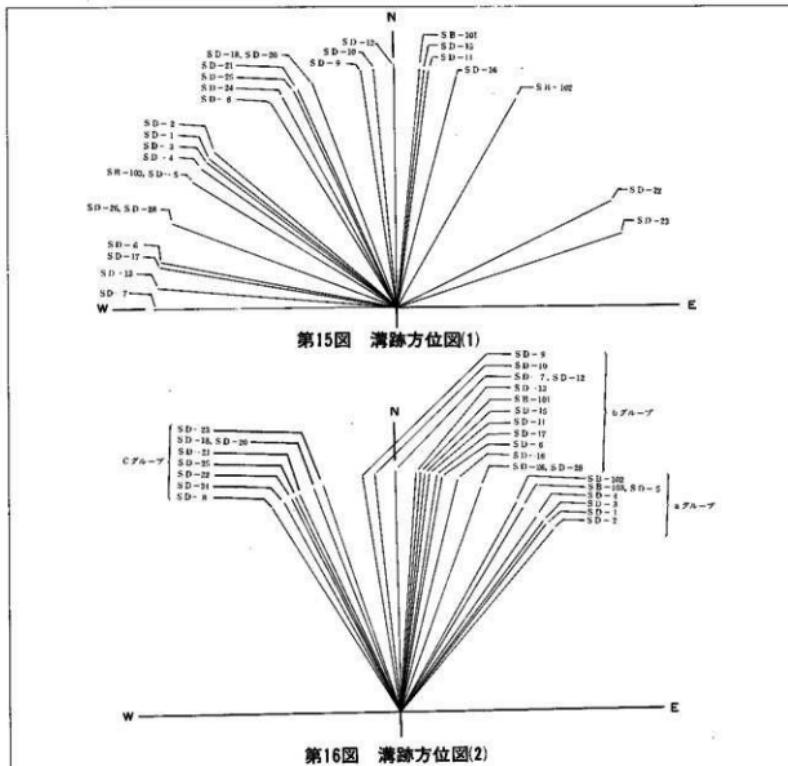
6. まとめ

今回実施した調査により出土した遺物は6世紀後半・7世紀前半・8世紀代・9世紀代を中心とした時期に大別され、古い時期のものからⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期・Ⅳ期とする。検出された遺構、すなわち堅穴住居跡（SB-1）・掘立柱建物跡（SB-101～103）・溝跡（SB-1～28）・土塙（SK-1～8）・包含層4層等をこれらの時期にあてはめると以下のようになる。

Ⅰ期：SB-1、SD-14、SK-1

Ⅱ期：黒褐色粘質土層

Ⅲ期：SD-6・8・10・11・13・16・19・22・24、Pit 7、黒灰色粘質土層、淡灰茶褐色砂質土層



IV期：Pit 10

ただし、黄灰褐色粘質土層についてはIII～IV期と長期間にわたる遺物が共伴している。そして、調査で検出された数少ない建物遺構であるSB-101～103において、柱穴等から遺物の出土がみられず時期を明確におさえることができなかった。そこで、検出遺構の大半を占める溝跡との方位や埋土等の関わりからこれらの時期を検討してみる。

各掘立柱建物跡及び溝跡を遺構の項目で述べた方位にしたがって北を中心にして図化すると第15図になる。そして、互いに直交するものは同一方位をとるとみなし、北を中心に東西各45度以上振るもの北方向へ90度回転させ合成したのが第16図である。その結果、北から30～40度前後東へ振るaグループ、北から東へ20度前後ないし西へ10度前後振るbグループ、及び北から20～30度前後西へ振るcグループの3グループにおよそまとまることが判明した。第16図によるとSB-101はbグループに属し、特にSD-6・11・13・15・16・17と共に集中する傾向がある。そしてSB-101の柱穴埋土は、暗茶褐色粘質土で、これらの溝跡でSB-101と共通する埋土をもつものはSD-11・16である。したがってSB-101もIII期に入ると考えてよいのではなかろうか。またSB-102及びSB-103は第16図によればaグループに属し、ほぼ同一方位をとるため同時期のものとしてとらえられるであろう。しかしaグループに属するSD-1～5からは、時期を決め得る遺物の出土はみられない。そして、もし仮にSD-1～5の時期がおさえられたとしても、両者の埋土には明らかな相違があり同時期とすることには疑問がある。それではSB-102・103の時期はどうかと言うと、非常に消極的な根拠であるが、これらはSB-101と比較すると柱穴の並びが不規則でありかつ柱穴が小規模であるということから、SB-102・103はSB-101より後出のものであろうと思われる。ただし、その時期がIII期であるかIV期になるものであるかは不明と言わざるを得ない。

次に今回の調査で出土した遺物において、注目すべきは和同開珎が100点出土したことであろう。

和同開珎は周知のとおり奈良時代から平安時代にかけて鋳造された皇朝十二銭の1つである。大化改新以来、律令体制の確立をめざしてきた我が国は、唐の文化・諸制度を積極的に取り入れていた。そして和銅元年（708）に武藏国秩父より銅が献上されたのを契機に和同開珎の鋳造となつたのである。³⁰¹

和同開珎鋳造の目的は、唐の貨幣制度を模倣することによって、これまでの商品経済から貨幣経済への転換が意図されていた。

和同開珎は当初銀銭と銅銭が鋳造されたが、交換レートが1対4と低かったため、翌年には銀銭は廃止されている。しかし銀銭は再び鋳造され1対50という高レートで使用されるようになる。また一部が欠損していたり銭文の不明瞭な銭がきらわれ、銭の私鋳が行われるようになる。このように、撰銭や私鋳銭の出現により貨幣制度の混乱を恐れた国家は、「万年通宝」をはじめとして改銅を繰り返すのである。しかし、改銅ごとに新旧の交換レートが高くなっている、その結果イン

フレをまねいている。さらに、銅産出量の低下により銅の含有量が低下し、粗悪品が増加した。それに加えて私鋳銭の大量流通により、貨幣経済はいよいよ大混乱に陥り入り亂元大宝を最後に新銭の鋳造は行われなくなる。

ここでは、日野町の宮ノ前遺跡で和同開珎100枚が出土したことについて若干の考察を行いたい。その前に、滋賀県下において出土した和同開珎についてみてみよう。県下では26地点で和同開珎の出土が知られ、その総数は約300点にものぼる。各々については第2表に示したとおりである。なお、この表は柴原永遠男氏の「日本古代銭貨出土一覧表（その1・その2）」（『続日本紀研究』第169・178号1973・1975）をもとに、西田弘・中川正人両氏の御教示により作成したものである。ただし、表にある性格・立地は主に『昭和55年度滋賀県遺跡目録』から引用した。また、時期については、和同開珎が出土した遺構または共伴遺物によりその時期をおさえることを主眼としたが、判然としないものは上記の遺跡目録によった。

第2表 滋賀県下における和銅開珎出土遺跡一覧表

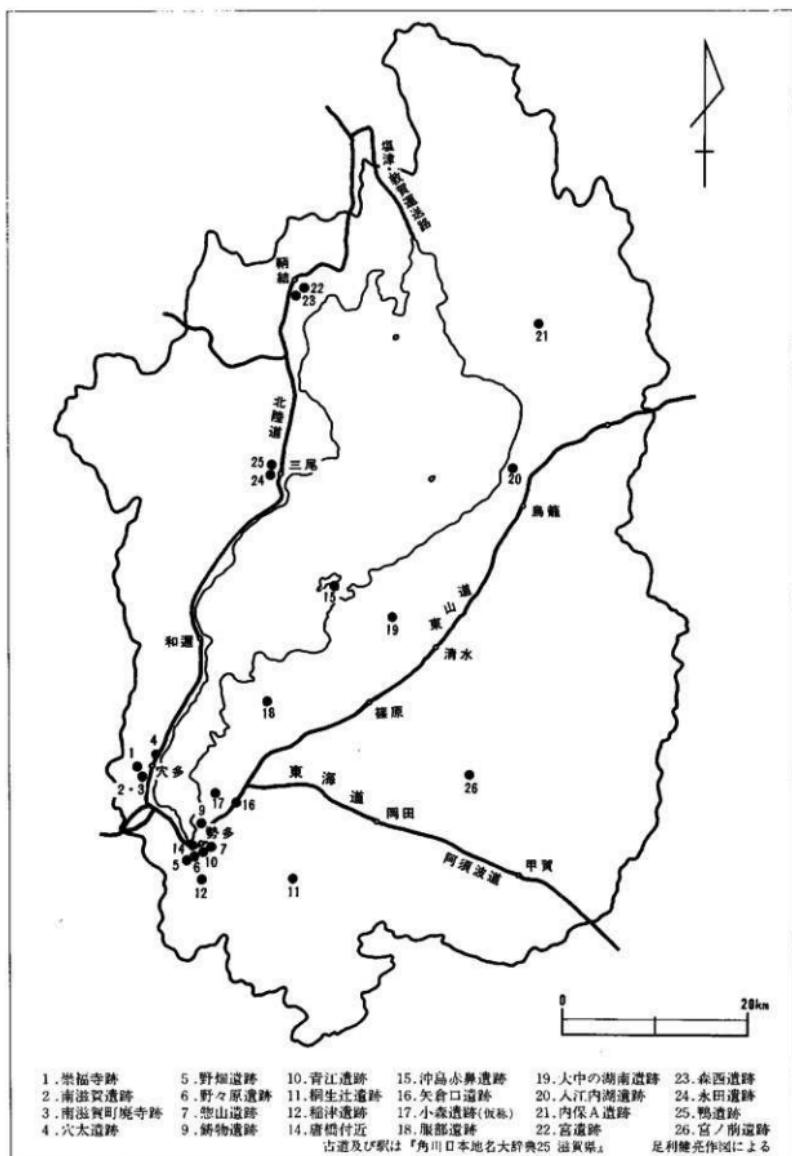
番号	遺跡名	所在	点数	出土状況等		性格	時期	立地	備考
1	崇福寺跡	大津市 滋賀里町	1	弥勒坐東方の崖より土器・万年通宝・隆平永宝・富寿神宝・乱元大宝と共に採集		寺 院	白 馬 半 安	山腹 丘陵	柴田実「滋賀県史跡調査報告書第十一回大津京跡（下）」 1941
			2	坂本橋右衛門氏所藏					
			1	白子庄七五氏所藏					
			1	弥勒坐址より承和昌宝・長年大宝・鷦鷯神宝を除く皇朝十・錢と共に					肥後和男「滋賀史跡調査報告書第二回大津京跡の研究」 1929
			15	金堂内陣東端近くより、万年通宝・神功開宝と共に					白子庄五郎氏所藏
2	南滋賀 遺跡(1)	大津市 南滋賀町	5	坂村の勾当付近遺器室内より					
	南滋賀 遺跡(2)		5	暗赤灰色砂質土（やや黒っぽい）の落込みより、生に七郎器皿と共に重なって					1982年調査未報告
3	南滋賀町 庵寺跡	大津市 南滋賀町	5	頸椎器蓋（歯骨器）内より骨片と共に		古 墓	半 安	丘陵	近江風土記の丘所藏
4	穴太遺跡	大津市 穴太町	2	包倉層（灰黒褐色粘質土層）より		集落・寺院	繩 文 半 安	削状 地	1976年試掘調査未報告
5	野畠遺跡	大津市 瀬田 橋本町	2	S E 0 0 4 横方（灰褐色砂質土）より 2 S E 0 0 4 横方（灰茶褐色粘土層）より 1 S E 0 0 4 地上（暗赤灰色粘質土層）より 3 溝（暗赤褐色粘質土）より		官衙に付 属する生 産遺跡的 な集落	8C後半 3 9 C	丘陵	1982～1984年調査未報告
6	野々原 遺跡	大津市 瀬田 橋本町	2	万年通宝・神功開宝と共に須恵器蓋付塗内 より		古 墓		丘陵	肥後和男「滋賀県史跡調査報告書第十回大津京跡（下）」 1941 中川近礼「奈良に入りたる古銭」（考古学全報）第2卷第6号1898）

7	磐山遺跡	大津市 瀬田神福町 磐山	?		官 街	奈 良	古地	滋賀県教育委員会「昭和55年度滋賀県遺跡目録」 1981
8	?	大津市 石山	1	万年通宝・神功開宝と共に発見				
9	銘物遺跡	大津市 瀬田東大 萱町半町	?	堆塚と共に	銅 鋼 跡	奈 良	平地	滋賀県教育委員会「滋賀県 遺跡目録昭和40年度」 1966
10	青江遺跡	大津市 瀬田神領町 青江	?		寺 院 (国分尼寺 推定地)	奈 良	古地	
11	桜生辻 遺跡	大津市 上田上 桜生辻	?	布に包まれた痕跡のある八寸大の一尾のもの	古錢 出土地	奈 良	山麓	滋賀県史蹟名勝天然紀念物 調査会「滋賀県史蹟名勝天 然紀念物」1936
12	稻津遺跡	大津市 田上越津町	4		古錢 出土地	竈 町	丘陵	平賀宣政「古錢分析表」(『考古 学雑誌』第9巻第2号1919)
13	紙調遺跡	大津市 紙園一町田	?	土器器・須恵器・万年通宝・神功開宝と共に				
14	唐輪付近	大津市 瀬田	1	瀬田橋付近の瀬田川より他の皇朝十二銭と 共に				根岸武秀「瀬田川発見の皇 朝十二銭」(『考古界』第1卷 第2号1901)
15	沖島赤堀 遺跡	近江八幡市 沖の島	71	海中より万年通宝・神功開宝と共に	古錢 出土地	平 安	湖底	
			3	海中より万年通宝・神功開宝と共に				滋賀県教育委員会・鶴滋賀 県文化財保護協会「琵琶湖 海岸・湖底遺跡分布調査概 要」1973 西居英二郎氏所蔵
16	矢倉口 遺跡	草津市 矢倉町	1	S E 0 3 より万年通宝・神功開宝と共に須 恵器壺の下に敷くような状態で	役人の店 住む集落	奈良後期 平安前期	平地	草津市教育委員会「草津市 文化財調査報告書 8市内遺 跡分布調査報告書」1984
17	小森遺跡 (飯称)	草津市 御倉	8	包含層(褐色砂層)より	集 落	奈 良	平地	1984年度 調査中
18	服部遺跡	守山市 服部	3	溝内より	集落・墓地	奈 良	平地	滋賀県教育委員会・守山市 教育委員会・鶴滋賀県文化 財保護協会「服部遺跡発掘 調査概報」1979
			1	ビット内より万年通宝と共に				
			約10	掘立柱建物跡検出面より皇朝十二銭及び 平永宝と共に				
19	大中の浦 南遺跡	安土町 能登川町	5	地表または砂層より寛平大宝以外の皇朝十 二銭と共に散乱	集 落	鶴 文 平 安	湖底	佐藤宗男「大中の湖南遺跡 出土の皇朝十二銭について」 (滋賀文化財研究所 「滋賀文化財研究所月報 1968年度」1968)

20	入江内湖遺跡	木原町 磯	3 以上	耕作中	集落	繩文 平安	平地	磯崎文五郎氏発見 入江干拓事務所保管
21	内保A遺跡	浅井町 内保塚塚	6	土師器壺より	古墓	奈良 後半	平地	滋賀県教育委員会「昭和55年度滋賀県道路日録」 1981 浅井中学校所蔵
22	宮遺跡	マキノ町 蛭口宮 辻遺	25	地下1尺の深さより須恵器杯の中に3ヶ所に分けて横重ねられ杯蓋がかぶせてあつた。文字面を上にして重ねられ蓋上の1枚だけが表しきらえていた。	古墓	奈良	平地	琵琶湖文化館「近江文化シリーズ第4回展示図録『奈良時代の文化』1974
23	森西遺跡	マキノ町 森西	?		古墓	奈良	平地	
24	永田遺跡	高島町 鷹栖牛糞	1	井戸1の堆土より	下級官僚 の館跡	8C末 9C初	平地	1984年度 調査未報告
			2	包含層より				
25	鴨遺跡	高島町 鷹栖牛糞	4	包含層より	集落・官衙	平安	平地	高島町教育委員会・滋賀県教育委員会・御池賀県文化財保護協会「高島町歴史民俗叢書第二梅鴎遺跡」1980
26	宮ノ前遺跡	日野町 石原 宮ノ前	100	淡黒褐色粘質土の土塗状の落込みより正位窓の状態で出土した土師器壺内より上師器皿と共に	集落	奈良	平地	

第2表により県下の和同開珎出土状況におけるいくつかの特徴をあげると次のようになる。

まず、和同開珎がどのような出土状況により発見されているかである。遺構に伴って出土したものは、崇福寺跡の弥勒堂跡・金堂内陣、野畑遺跡のSE004・溝、矢倉口遺跡のSE03、服部遺跡の溝・ピット、永田遺跡の井戸1となり、5遺跡10例30点である。土器内に納められていたものは、南滋賀遺跡の須恵器壺・土師器皿、南滋賀町庵寺跡の須恵器壺、野々原遺跡の須恵器壺、内保A遺跡の土師器壺・宮遺跡の須恵器杯・杯蓋、宮ノ前遺跡の土師器甕・皿となり、6遺跡7例148点である。これら以外は包含層からの単独出土か採集品である。このことから、県下で出土した和同開珎の約半数は何らかの理由により、土器内に納められていることがわかる。この理由としては、南滋賀町庵寺跡のように骨器内に納められる副葬品説・南滋賀遺跡(1)や宮遺跡等のようにある一定の数量を一単位として蓄える貯蔵説等が考えられるであろう。また、土器に納められてはいないが、和同開珎が埋納されるもう一つの理由として、野畑遺跡のSE004例のように斎場が共存しており地鎮の意味合いも含まれるであろう。¹⁰²そして、これと同様なことが南滋賀遺跡(2)・服部遺跡ピット内出土例・矢倉口遺跡にも言えるであろう。



第17図 和銅開塙出土遺跡位置図

次に、和同開珎が出土した遺跡をその性格により分類すると、官衙または官僚の居住地・寺院跡古墓・鉄銅跡・集落・古錢出土地に大別できる。官衙または官僚の居住地とされる遺跡は7遺跡である。南滋賀遺跡(2)は大津京に関連すると思われる南北方向の溝が検出され、墨書き土器が出土している。野畠遺跡では木簡・墨書き土器・転用硯の出土をみる。惣山遺跡は近江国府の一部である。矢倉口遺跡ではL字形配置をとる掘立柱建物群が検出され、木沓・墨書き土器が出土している。服部遺跡からは銅印・木簡・帶金具・墨書き土器等が出土している。永田遺跡からは木簡・帶金具墨書き土器・転用硯が、また、鴨遺跡では銅印・木沓・木簡・墨書き土器がそれぞれ出土している。寺院跡は崇福寺跡・穴太遺跡・青江遺跡の3遺跡で、これらはいずれも官寺かまたはその可能性の高いものである。古墓として断定できるのは南滋賀町庵寺跡のみで、野々原・内保A・森西・宮の各遺跡は骨片等の確認がされていない。特に宮遺跡については前述の貯蔵説をとると古墓とは言いがたい。¹¹³ 鉄銅跡である鑄物遺跡は壇場が併出しただけで、錢範や工房跡が発見されたわけではないが、近江鑄銭所の有力な候補地として見のがせないであろう。

これらの特徴をふまえて、和同開珎出土の意味ひいては宮ノ前遺跡の性格についてふれてみよう。和同開珎は土師器の裏に納められていたことは前述したとおりである。しかし、骨片の出土が認められないでこの裏は藏骨器とは考えられず、和同開珎埋納の意味として副葬品説をとることはできないであろう。また、地鎮の対象となる遺構が確認できていないので、地鎮説をとるには根拠的に弱い。したがって宮ノ前遺跡出土の和同開珎は貯蔵説をとるのが最も適切であろう。多数の出土でありながら100枚という単位的まとまりがあり、ひも状のもので連結されていたと思われるような状態であったことは、この貯蔵説を裏付ける有力な根拠となるのではないかろうか。

次に宮ノ前遺跡とはどのような性格の遺跡であるかということである。遺跡の大半を占める8世紀代の遺構は、掘立柱建物跡と溝跡等である。しかし、検出された掘立柱建物跡はわずか3棟で何らの規格性も認められない。また、多数の溝跡もある程度のまとまりはあるが、ある一定の方位や地割との関連が認められるわけではない。したがって、遺構からみる限りでは、宮ノ前遺跡は一般集落と考えられるであろう。しかし、遺物をみると、先ほどから述べている大量一括出土の和同開珎、SD-11等から出土した円面硯・転用硯が注目される。これらの遺物からはある程度の財力と知的教養を有する人物の存在が窺える。そして、宮ノ前遺跡はこの人物たとえば官人や役人が居住生活していた地域ということになる。それは、館等の私的なものや役所の出先機関・莊園等の公的色彩の強いものが考えられるが、現時点では宮ノ前遺跡がそのどちらに該当するか判断する資料に乏しい。また、包含層からわずかではあるが瓦が出土しており、付近に瓦葺の建物が存在する可能性もある。そして、もう一つ第17図に示したように、官衙または官僚の居住地とされる和同開珎出土遺跡が古代幹道に近接する傾向であるのに対し、宮ノ前遺跡だけは古代幹道からはなれており、宮ノ前遺跡の性格を知る上で何んらかの問題点を提起するものであろうか。

以上、今回の調査で判明した事実により宮ノ前遺跡の性格について若干の考察を述べた。しかし、依然として遺跡の全貌については把握できており、今後の調査で一層の成果があがることを期待する。最後に、滋賀県下における和同開珎出土遺跡一覧表を作成するにあたり、資料や情報を提供していただいた各遺跡の調査担当者をはじめとする諸氏に厚く御礼申し上げます。なお、この一覧表は筆者自身が实物を確認せず文献や電話連絡により短時間に作成したため、事実関係の相違・逸脱があるかと思われる。大方の御叱責と御教示を賜わりたい。

【注】

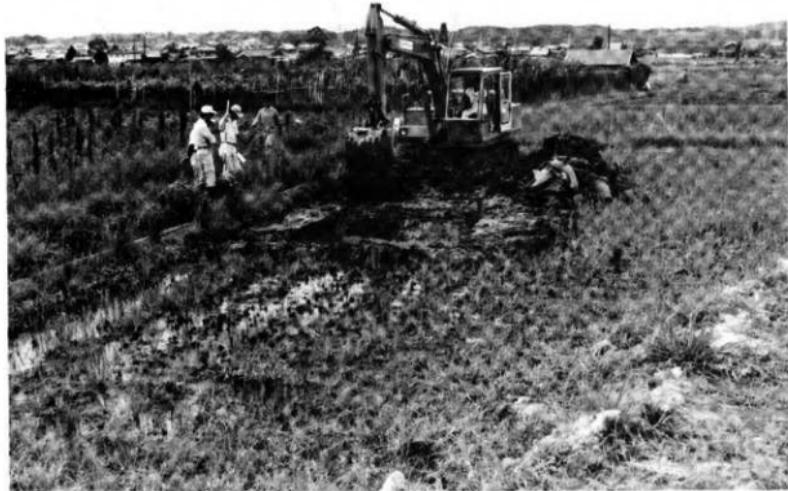
- 〈注1〉 卷六第十七節朝日野村 竹山神社
- 〈注2〉 『近江蒲生郡志』卷一 1922
- 〈注3〉 山本一博「日野町内池遺跡出土の磨製石鏃について」(『滋賀文化財だより』M68 勅滋賀県文化財保護協会1982)
- 口永伊久男「内池遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告X-5-2』滋賀県教育委員会・勅滋賀県文化財保護協会1982)
- 〈注4〉 水野正好『蒲生郡日野町小御門古墳群調査概要』1929
水野正好「蒲生郡蒲生町飯道塚古墳群発掘調査概要」(『滋賀県文化財研究所月報1968年度』滋賀県文化財研究所1968)
- 〈注5〉 近藤 滋・松沢 修「蒲生郡蒲生町・日野町 宮川・岡本古窯跡 大谷古窯跡調査報告」(『昭和五十年度 滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会1977)
- 〈注6〉 日永伊久男「日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集」1985
- 〈注7〉 山口利彦「甲賀郡水口町春日山の神古窯跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報昭和四十八年度』1975)
松沢 修「水口町峰道1号古窯跡出土の遺物について」(『滋賀文化財だより』M639勅滋賀県文化財保護協会1980)
- 〈注8〉 日永伊久男「小御門城遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X-5-2』滋賀県教育委員会・勅滋賀県文化財保護協会1982)
- 〈注9〉 前掲〈注4〉と同じ
- 〈注10〉 器種の分類と口径等による細分は『平城宮発掘調査報告II・VII』(奈良国立文化財研究所1962・1976)に準じた。
- 〈注11〉 和同開珎の初鋳が708年であることは定説になっているが、文献上ではそれ以前に銅錢・銀錢・鎔錢司という記述が認められる。また、崇福寺・川原寺・船橋遺跡等からは和同開珎より明らかに先行する無文銀錢の出土が知られる。

- 〈注12〉 滋賀県外で和同開珎が地鎮のため埋納されていた調査例の一部に以下のものがある。
法隆寺発掘調査概要編集小委員会『法隆寺発掘調査概要II=昭和57年度防災工事に伴う発掘調査』1983
兵庫県教育委員会「上原田遺跡調査概報」(「播但連絡有料自動車道建設にかかる埋蔵文化財調査報告書II」1980)
森 郁夫「古代の地鎮・鎮壇」(『古代研究』28・29 元興寺文化財研究所1984)
- 〈注13〉 水野正好氏の御教示による。

図 版



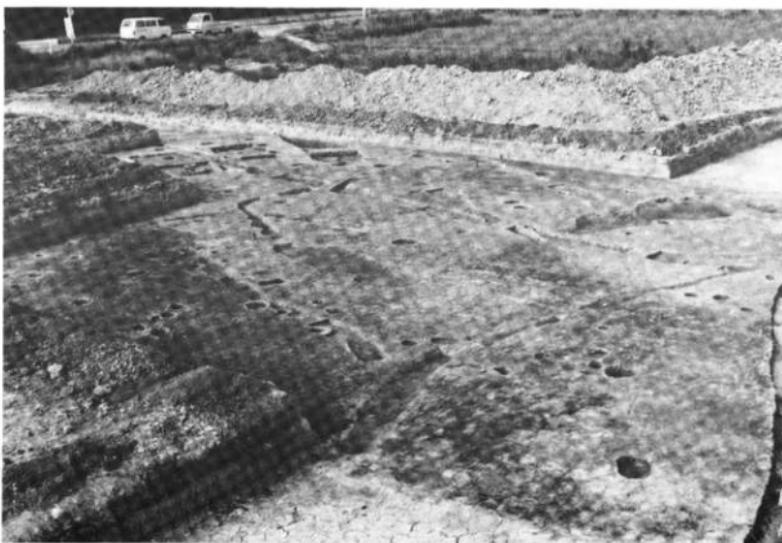
1. 遺跡遠景（南東より）



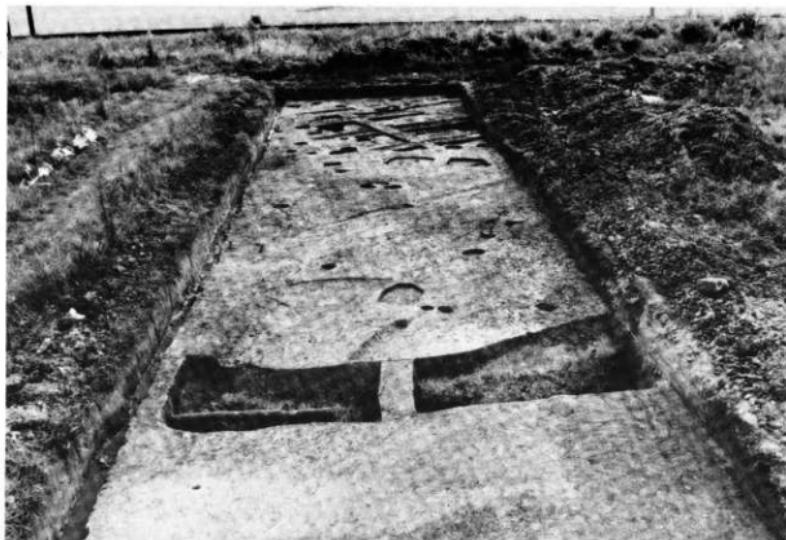
2. 試掘風景



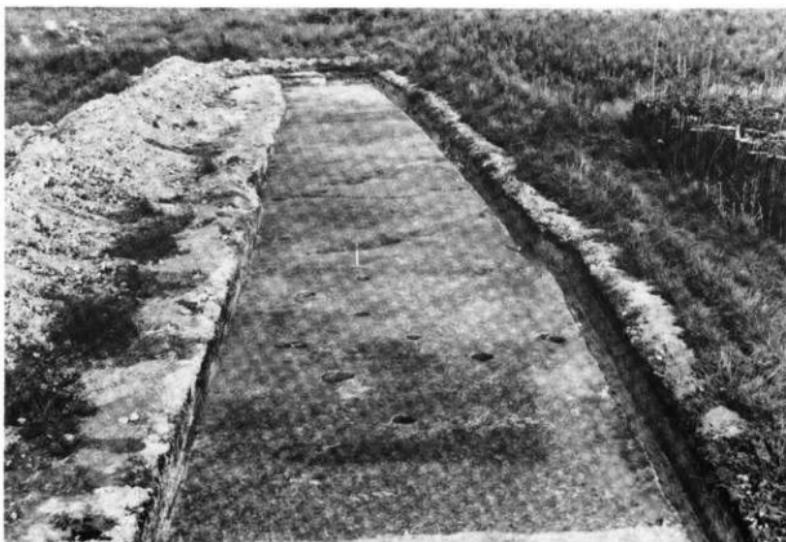
1. 中央部調査後（北より）



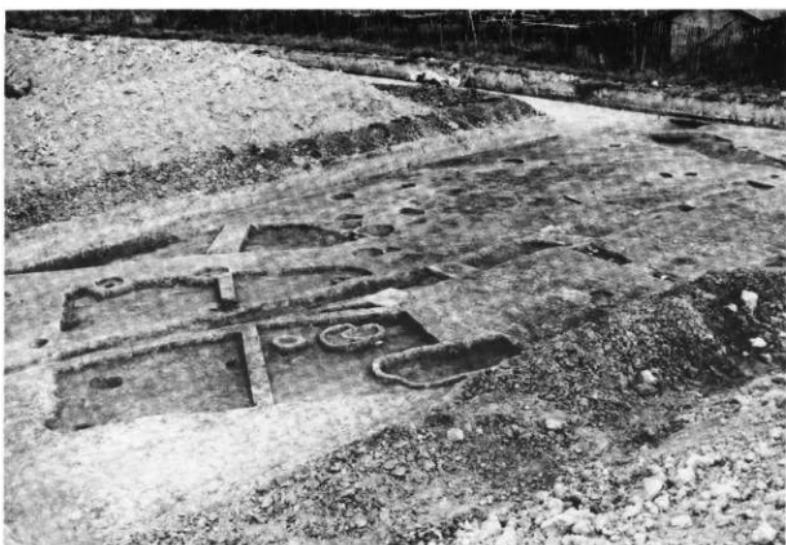
2. 中央部調査後（南より）



1. 西方部調査後（東より）



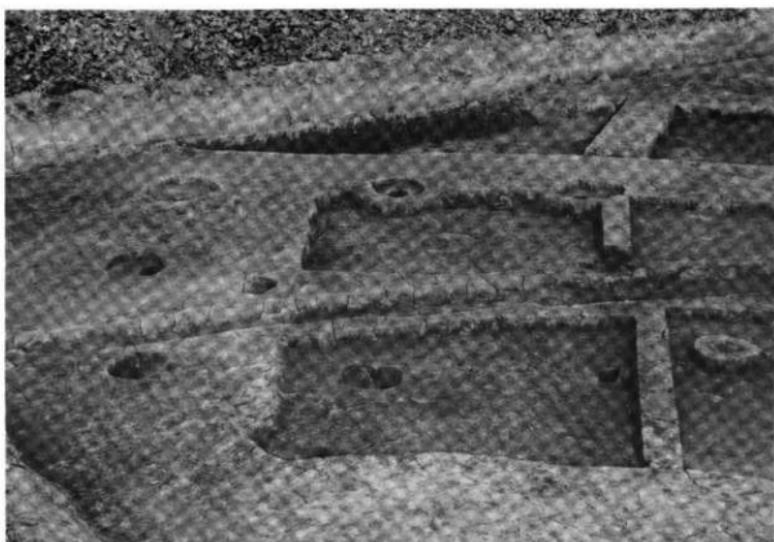
2. 東方部調査後（西より）



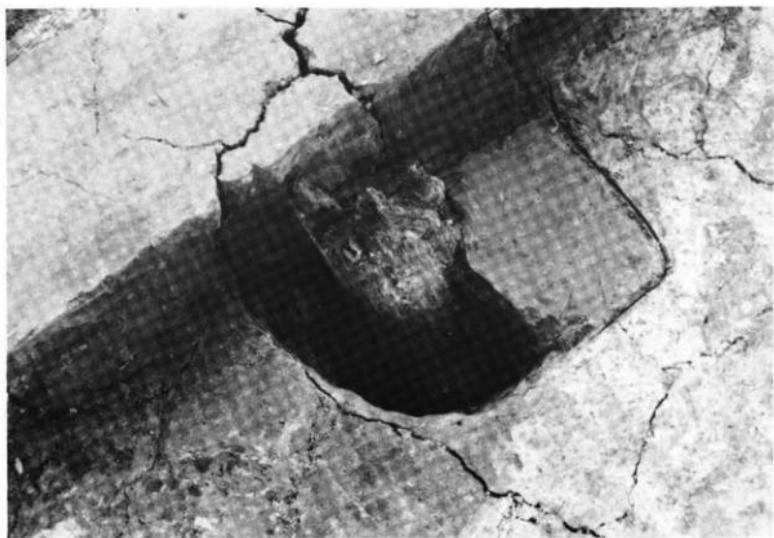
1. SB-I (北西より)



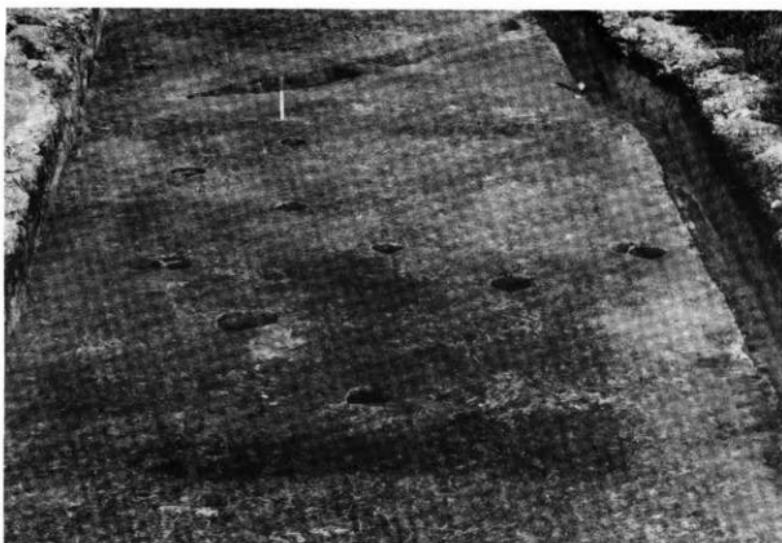
2. SB-I カマド (南より)



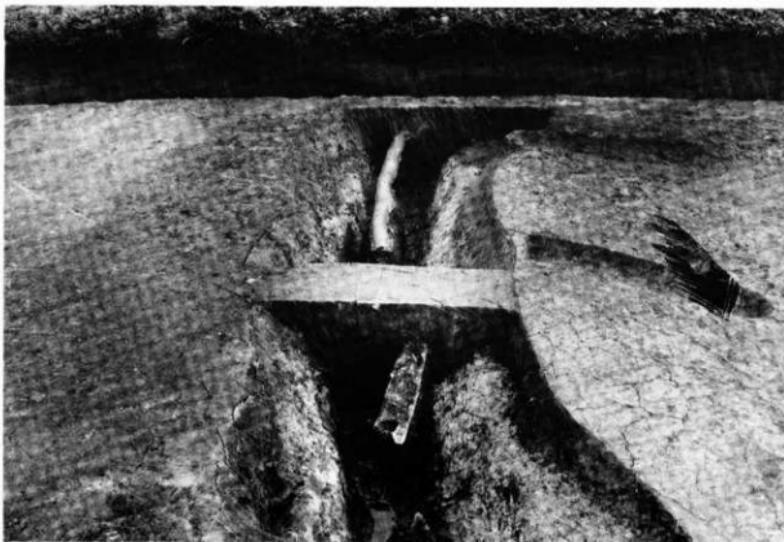
1. SB-101 (西より)



2. SB-101 柱根 (Pit 15) (北より)



1. S B-102 (西より)



2. S D-8 (北より)



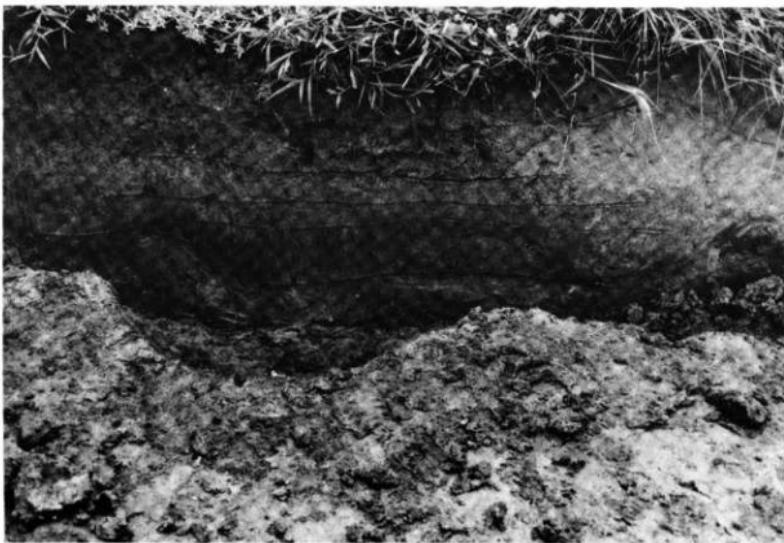
I. S B-I 土器出土状況



2. S D-II 土器出土状況



1. 和同開珎出土状況



2. 和同開珎出土層序

圖版九 宮ノ前遺跡出土遺物



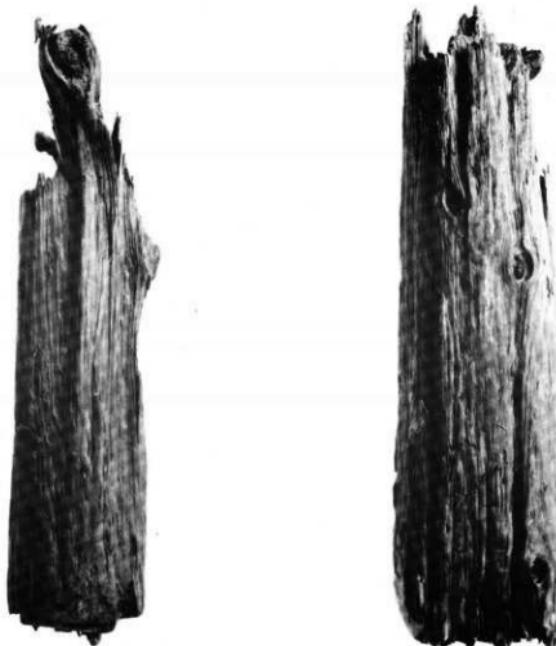
C 1

C 2



E 1

S B-1



柱根 1

柱根 2

S B-101

図版十 宮ノ前遺跡出土遺物



C 3



C 4

S D - 6



C 5



C 6

S D - 8



C 7



C 8



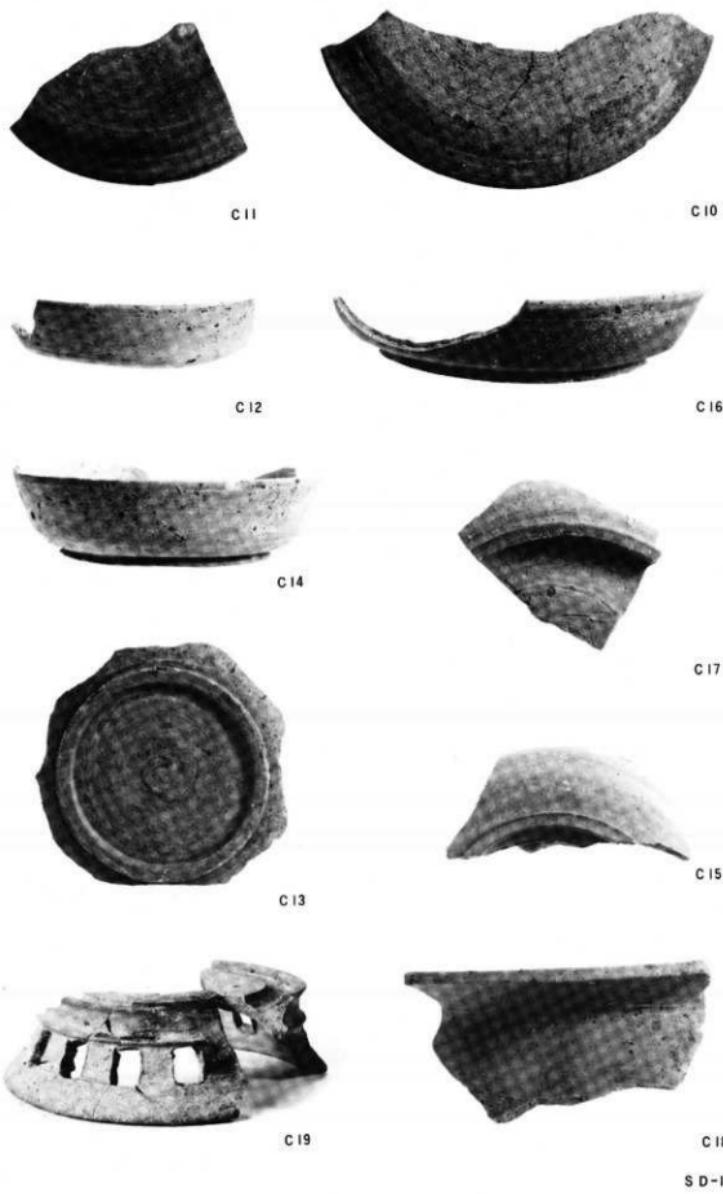
E 2



C 9

S D - 10

図版十一 宮ノ前遺跡出土遺物



図版十二 宮ノ前遺跡出土遺物



C 20



C 22



C 21

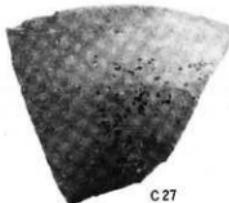


C 23

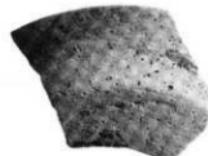


C 26

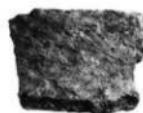
S D-13



C 27



C 25



E 3



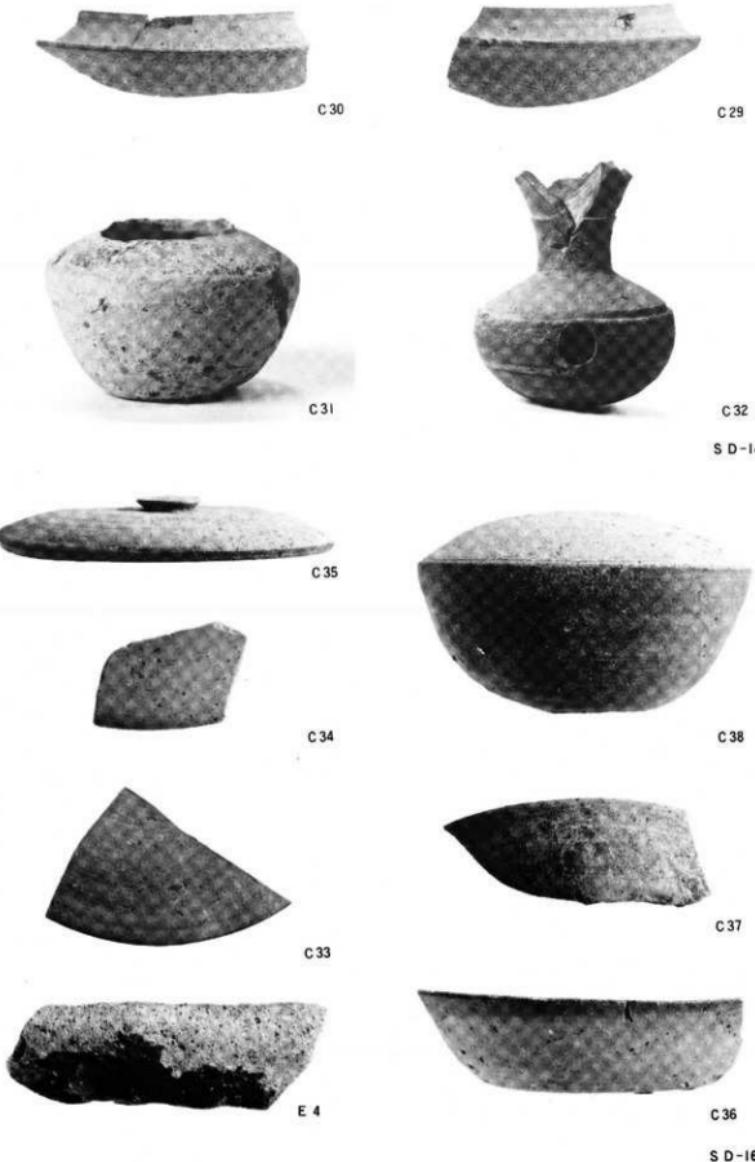
C 24



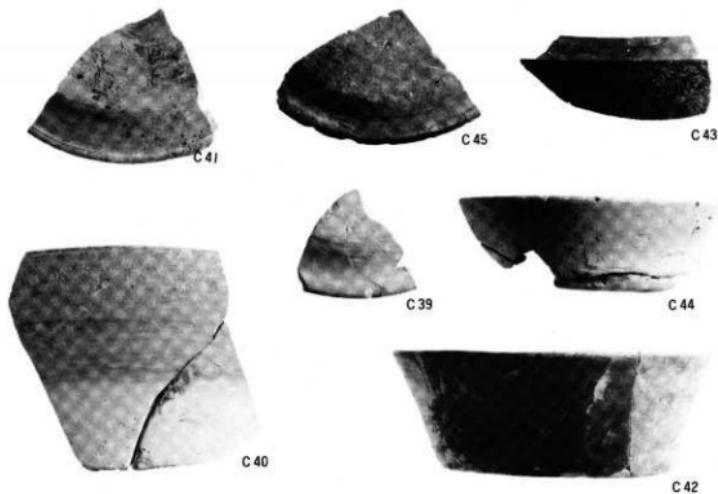
C 28

S D-13

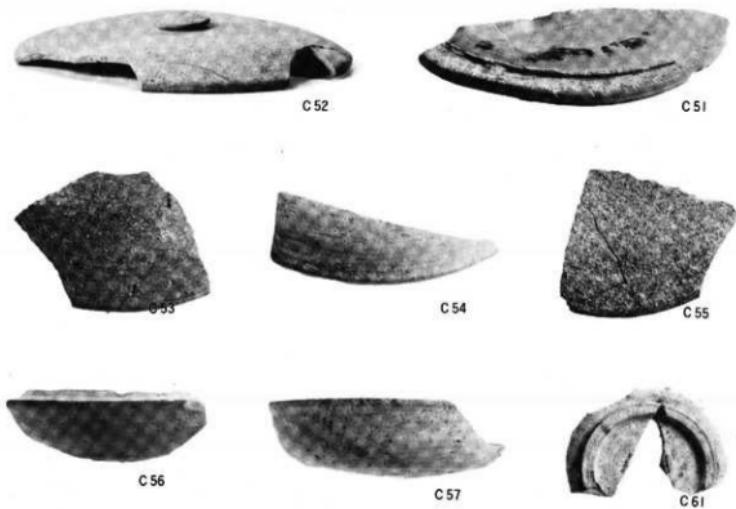
図版十三 宮ノ前遺跡出土遺物



図版十四 宮ノ前遺跡出土遺物

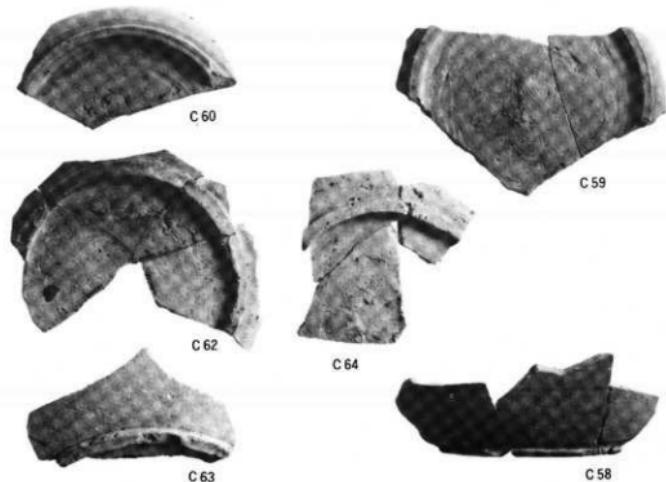


C39: SD-19 C40: SD-20 C41: SD-22 C42: SD-24 C43: SK-1 C44:Pit 7 C45:Pit 10

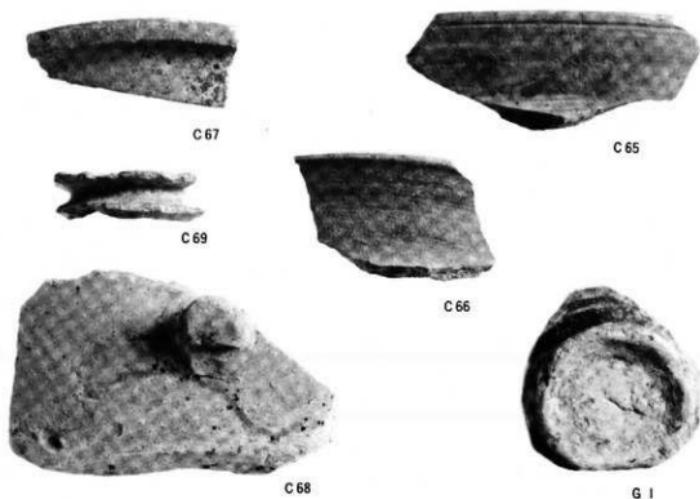


黄灰褐色粘土層

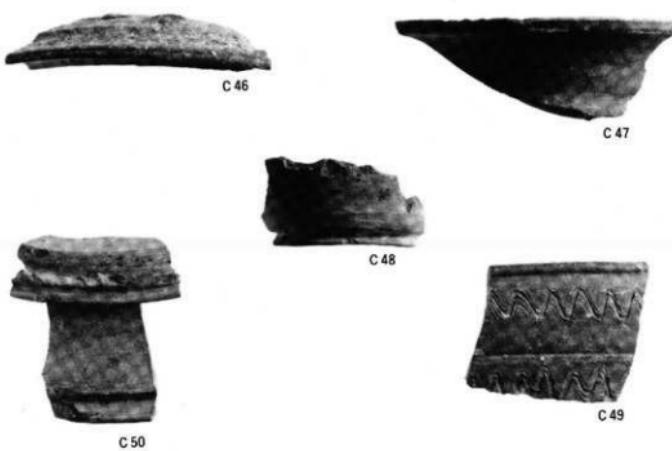
圖版十五 宮ノ前遺跡出土遺物



黃灰褐色粘質土層



黃灰褐色粘質土層



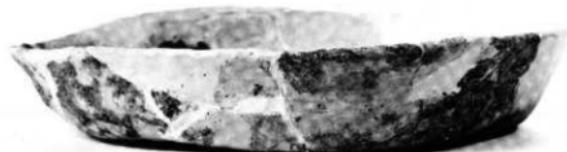
C46, C47: 黒褐色粘質土層 C48: 黒灰色粘質土層 C49, C50: 淡灰茶褐色砂質土層



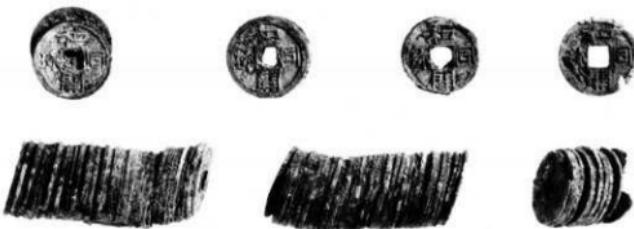
淡黒褐色土の土塊状の落込み



E 5



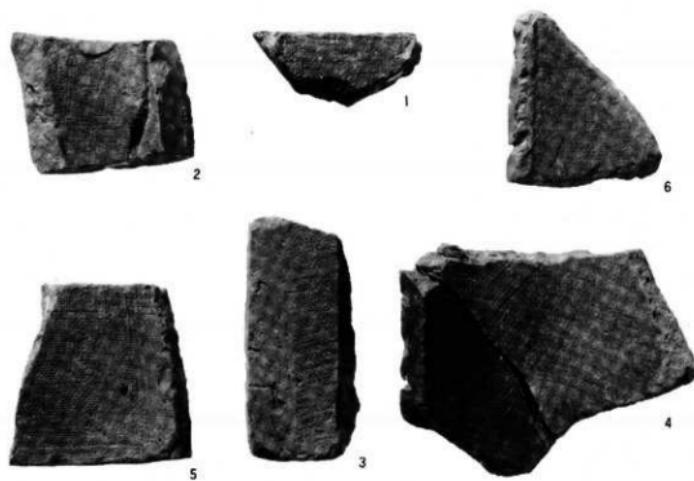
E 6



和銅開珠

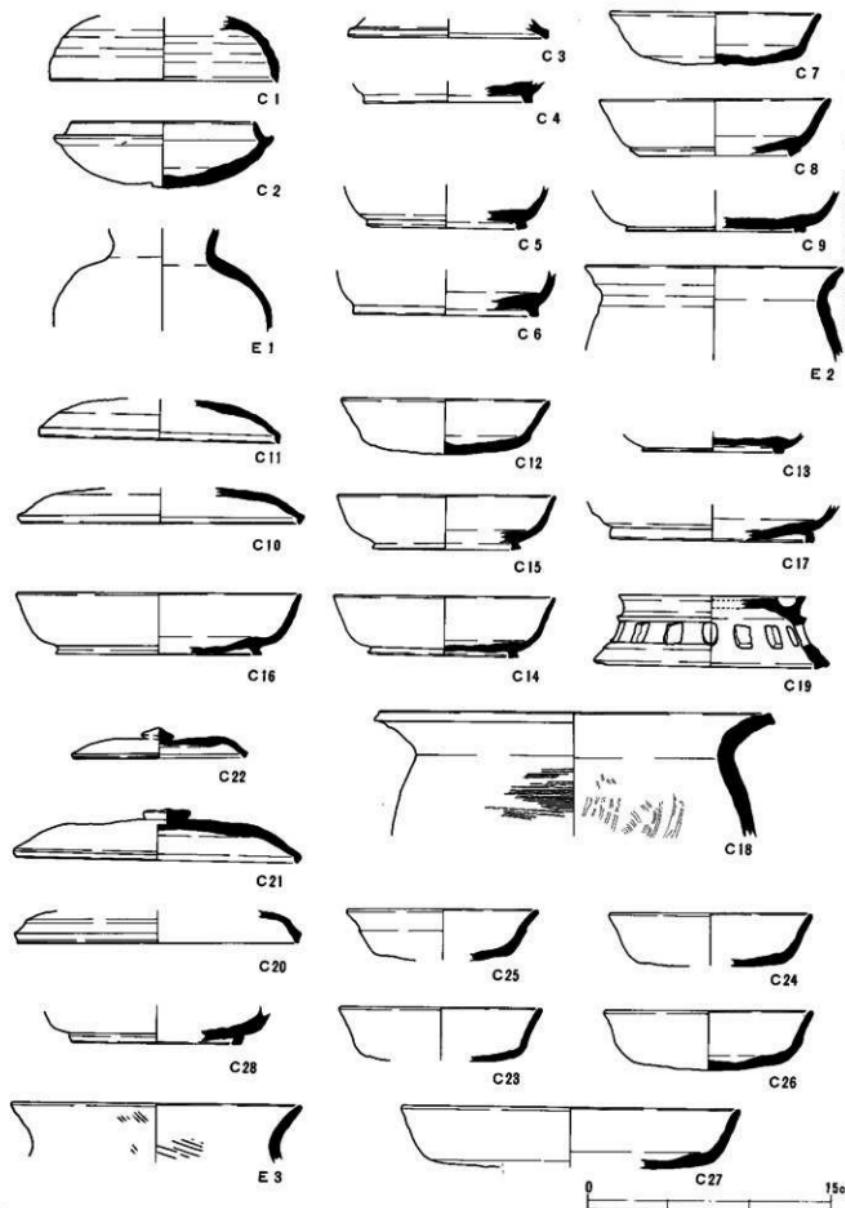
淡黒褐色粘質土の土塗状の落込み

図版十八 宮ノ前遺跡出土遺物



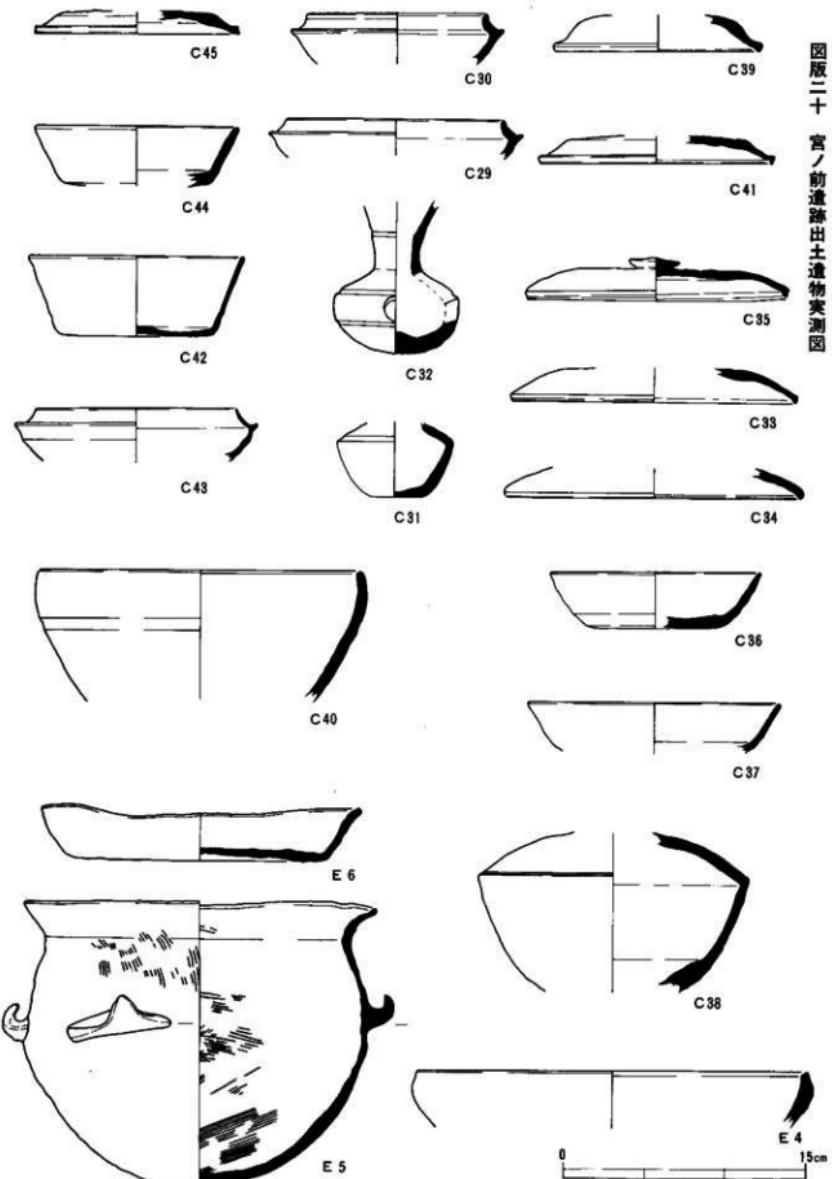
1~3:黄灰褐色粘質土層 4~5:淡灰茶褐色砂質土層 6:黒褐色粘質土層

図版十九
宮ノ前遺跡出土遺物実測図



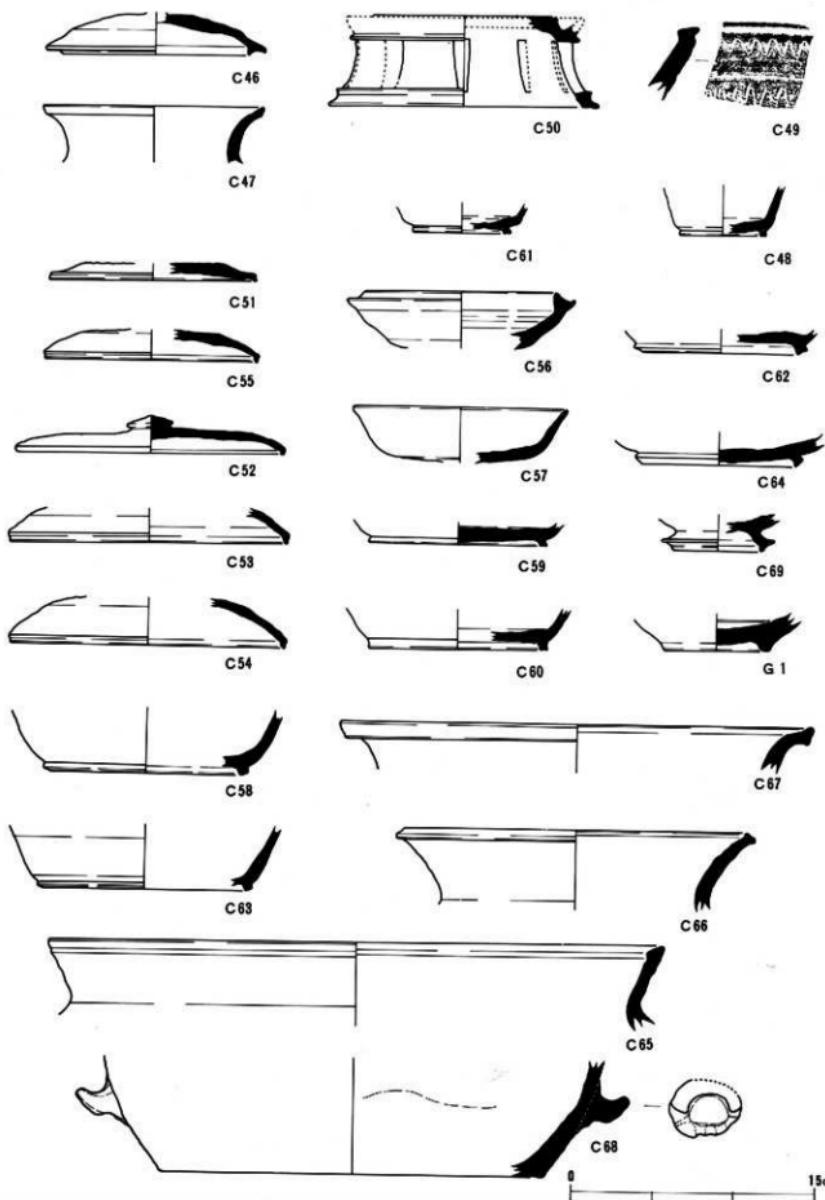
C1, C2, E1 : SB-1 C3, C4 : SD-6 C5, C6 : SD-8 C7~C9, E2 : SD-10 C10~C19 : SD-11 C20~C28, E3 : SD-13

図版二十 宮ノ前遺跡出土遺物実測図



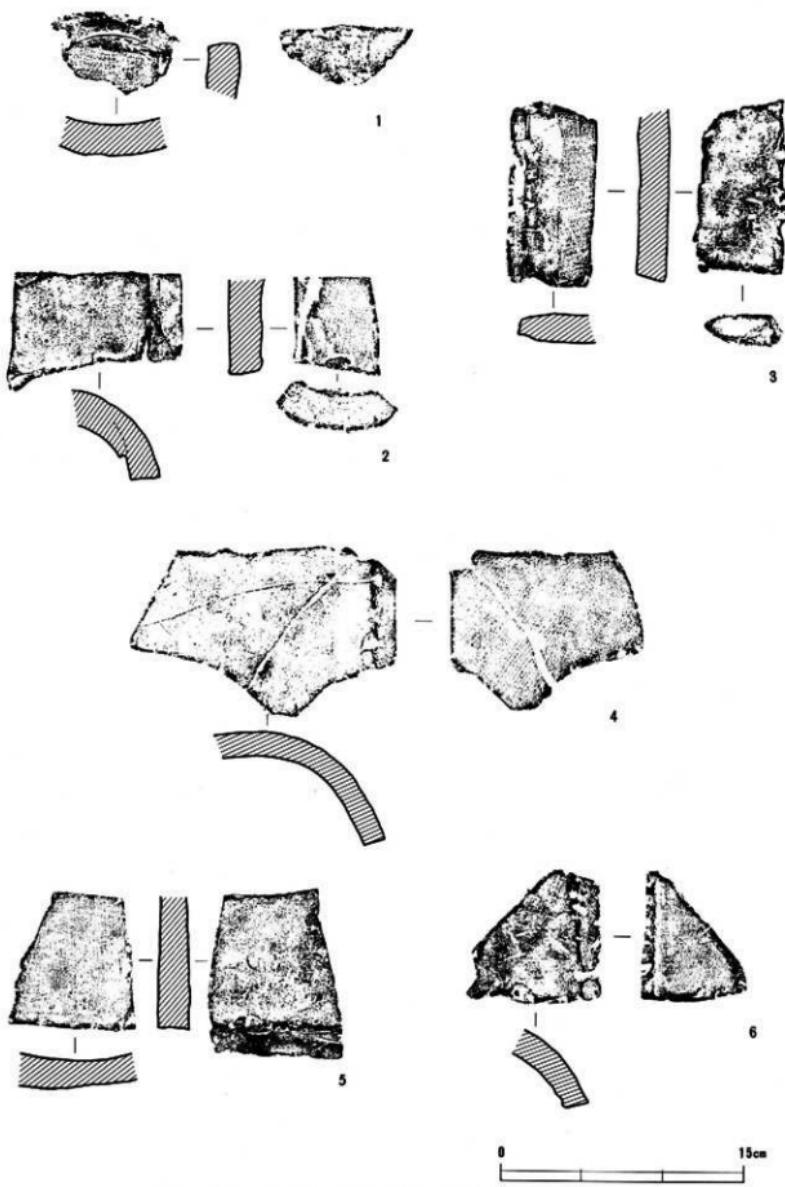
C29～C32: SD-14 C39: SD-19 C41: SD-22 C43: SK-1 C45: Pit10
C33～C38, E4: SD-16 C40: SD-29 C42: SD-24 C44: Pit7 E5, E6: 深灰褐色粘質土の土壤其の落込み

圖版二十一 宮ノ前遺跡出土遺物実測図



C46, C47: 黒褐色粘質土層 C48: 黒灰色粘質土層 C49, C50: 淡灰茶褐色砂質土層 C51-C69, G 1: 黄灰褐色粘質土層

圖版二十二 宮ノ前遺跡出土遺物実測図



1~3:黄灰褐色粘質土層 4・5:淡灰茶褐色砂質土層 6:黒褐色粘質土層

第 2 章

蒲生郡蒲生町外広遺跡

1. はじめに

本報告は、昭和59年度県営は場整備事業（蒲生南部地区鎌物師工区）に伴う蒲生町外広遺跡の発掘調査にかかるものである。外広遺跡は蒲生町教育委員会の実施する遺跡分布調査により、奈良時代から平安時代にかけての遺物の散布が認められていたために、は場整備に先立って発掘調査を実施し、遺構の有無と性格、遺跡の範囲等を把握して、その保存策を講じることとした。

調査は、滋賀県教育委員会が同農林部から依頼と経費（1,665,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。

発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会文化財保護課・主査 田中勝弘、技師 萩野泰樹、技師 田路正幸

調査担当 同上 田路正幸

調査員 横田文雄

調査補助員 出路清久、福本光宏、西塙博、沢村栄治

調査期間 I期、昭和59年6月

II期、昭和59年10月3日～13日

調査にあたっては、蒲生町教育委員会をはじめ、滋賀県農林部耕地建設課、同八日市県事務所土地改良第二課、蒲生町土地改良課、同町鎌物師地区、同土地改良区の方々に協力を仰いだ。また、蒲生町教育委員会技師 北川浩氏、および日野町教育委員会技師 日永伊久男氏には、調査の全般にわたって多くの協力と教示を得た。とくに記して感謝する。

なお、本報告の執筆、編集には田路があたった。

本文中に使用した遺構の略記号は次のとおりである。

S D：溝状遺構 S B：掘立柱建物

数字の上二桁にはトレンチ番号を付す。

2. 位置と環境（図1）

外広遺跡は、滋賀県蒲生郡蒲生町の最南部鉄物師地先に所在し、蒲生郡日野町石原と境を接している。遺跡の約1km西方を流れる日野川は、鈴鹿山系水口丘陵から日野町を経て蒲生町横山で、同じく綿向山から日野町北部を流れてくる佐久良川と合流する。遺跡は、日野川と佐久良川との間に横たわる丘陵西端部に立地し、標高は141.8~143.9mを測る。外広遺跡は、奈良時代から平安時代にかけての集落跡と考えられ、今回の調査地点はその西辺部にあたる。

蒲生町内の縄文時代については、鈴の堂山遺跡が中～後期に属するものと考えられているのみで、未だ詳らかではない。一方、日野町内でも、内池遺跡^①で晩期の上器、石鏟の出土が知られているだけである。弥生時代の遺跡では、蒲生町野瀬遺跡で中期後半に属する方形周溝墓群が検出されている^②が、同時代の集落についてはこれからの調査にまつところが多い。上記日野町内池遺跡では、中期の竪穴住居跡、方形周溝墓群が確認されており^③、日野川上流域の拠点的集落の様相を帯びる。

古墳時代に入ると、外広遺跡の南西、近江鉄道朝日野駅の東に呉媛塚が築かれ、もともと円墳であったと考えられるが、今はわずかに痕跡をとどめるに過ぎない。後期では、昭和40年に調査され、火化施設を備えるものを含む木棺直葬の小御門古墳群^④が営まれている。また、この時期の集落としては、内池遺跡で後期の竪穴住居跡14棟が検出されている^⑤。外広遺跡の南に接する宮ノ前遺跡でも、後期の竪穴住居跡1棟などが確認され^⑥、あるいは呉媛塚古墳との関連を示唆するものであるかも知れない。

北方約1kmの丘陵には、7世紀後半代を主体とした須恵器を焼成する岡本遺跡^⑦（岡本古窯跡）が存在する。ここでは一部6世紀代にさかのぼる遺物も報告されている。

奈良時代から平安時代にかけては、外広遺跡をはじめ、西に隣接する神闇遺跡、杉ノ木遺跡、田井遺跡などで遺物の散布が認められ、集落跡の存在が予想される。また、北西方に位置する麻生遺跡周辺には、中世麻生荘が置かれ、水晶の原石、加工品が出土することより工房跡の存在した可能性が強い。外広遺跡が所在する鉄物師（いもじ）も鉄金鍛冶との関連を思わせる。日野町金折山遺跡では、綠釉陶器が焼成されている。

中世にいたると、初期蒲生氏が居住したと伝えられる小谷城遺跡、小御門城遺跡、小御門中世墳墓群などが営まれる^⑧。

近世、この地では東海道土山から中山道愛知川にいたる御代参街道が振わいを見せ、日野町石原、蒲生町岡本には宿が置かれた^⑨。

遺跡の南辺に位置する竹田神社には、男神座像（国重文）や足利尊氏の寄進と伝えられる灯籠などが残されている^⑩。



図1 外広遺跡の位置と周辺の遺跡（矢印は調査地点）

- 1.外広遺跡 2.宮ノ前遺跡(日野町) 3.吳緩塚遺跡 4.神間遺跡 5.岡本遺跡 6.飲が塚
遺跡 7.頂塚遺跡 8.杉ノ木遺跡 9.田井遺跡 10.麻生遺跡 11.塔の堂遺跡 12.金折山
遺跡(以下日野町) 13.中山北遺跡 14.野瀬遺跡 15.田寺遺跡 16.下森遺跡 17.小谷城
遺跡 18.明性寺遺跡 19.小谷遺跡 20.口山遺跡 21.小御門古墳群 22.小御門中世墳墓
群 23.小御門城遺跡 24.内池遺跡 25.出雲川沿岸遺跡

3. 調査経過（図2）

今年度の調査は、近江鉄道朝日野駅の北方、県道朝日野停車場線の延長北側部分にあたる地点で実施した。は場整備は、夏期施工と冬期施工に分かれていたため、前者をI期A地区、後者をII期B地区とした。

調査は、両地区とも排水路敷に沿って、幅3m長さ3~5mの試掘トレンチを15~40m間隔に設定し、遺構が検出されたトレンチについては、拡張を行うこととした。

A地区では、昭和59年6月1日から3日間を要して、A・1~A・7トレンチの調査を実施した。

B地区では、昭和59年10月3日から、10月13日まで、B・1トレンチから、順次、機械による表土除去、遺構検出、写真撮影、実測作業を行なった。ここでは、B・6トレンチでのみ、第3層直下の茶褐色粘質上面で遺構が認められたため、長さ21mまで拡張を行なった。その他のトレンチでは深いところで、現地表下2m近くまで掘削したが、B・5トレンチにおいて、須恵器類の破片を見い出したのみで残りのトレンチにおいては、遺構・遺物とともに認められなかった。

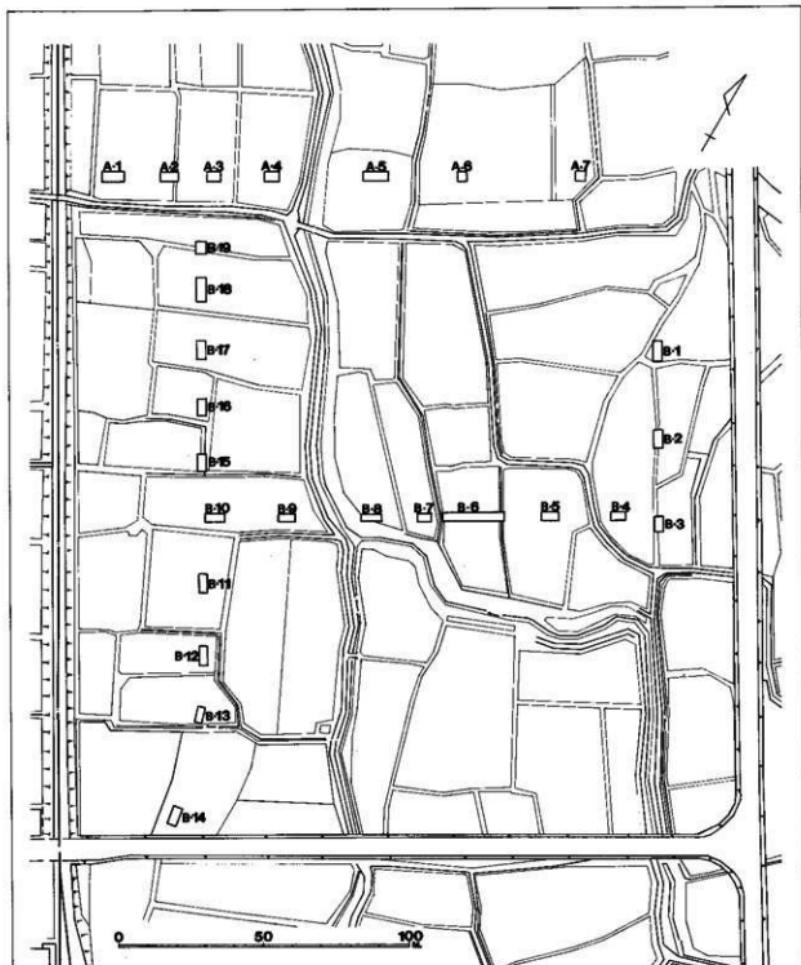


図2 外広遺跡トレンチ配置図

4. 検出遺構（図3～6）

1. A地区 通称古川の改修水路敷に、15～40m間隔で7ヶ所の試掘トレンチを設けたところ、A・3およびA・4トレンチで若干の遺構を検出した。A・3トレンチでは、長径2m短径1.5m、深さ0.2m前後の長円形の土壙状遺構、径0.6mのピット状遺構などがあるが、遺物の出土はなく、性格は不明である。

A・4トレンチでは、ほぼ南北方位をもつ、幅1.3m前後、深さ0.25m程の素掘りの溝を検出した。ここからも遺物の出土はない。

2. B地区 古川改修水路敷の続きと、第5～7号小排水路敷に15～30m間隔で、合計19ヶ所の試掘トレンチを設定した。B・5トレンチで、落ち込みと、B・6トレンチで溝、掘立柱建物などを検出したが、その他のトレンチには遺構は認められなかった。この地区は、東から西に向かって地形が傾斜しており、東側で標高143.9m、西側で141.8mを測る。

基本層序は、第1層耕土、第2層に床土があり、第3層黄～茶灰色の砂質土、第4層暗灰～茶灰色粘質土、第5層暗灰色ないし黒褐色の粘質土が堆積する。B・5、7、9などでは、さらに下層で暗青灰色砂層を検出した。

B・6トレンチで検出した遺構は次のとおりである。

S D 0 6 0 1は、幅0.7m、深さ0.2mを測る溝である。S D 0 6 0 2も幅0.3m～0.5m、深さ0.2mを測る溝であり、両者は、約11.5mの距離をもって平行し、N30°Wの方位を示す。

S B 0 6 0 1は桁行1間以上、梁行1間の掘立柱建物である。柱間距離は、P・2～P・3で1.5m、P・1～P・2で2.6mを測る。柱穴は、径0.25～0.3mの円形で、深さは0.15m前後である。方位は、桁行で15°、西に振る。

S B 0 6 0 2は、東西方向の3柱穴2間分を検出した。S B 0 6 0 1の南辺に平行する。柱間距離は、各々2.0mを測り、柱穴は径0.3mの円形で深さは0.3mである。連続する柱穴はトレンチ内では検出されず、規模性格ともに不明である。

溝、掘立柱建物ともに出土遺物はなく、築造時期は不明とせざるを得ない。

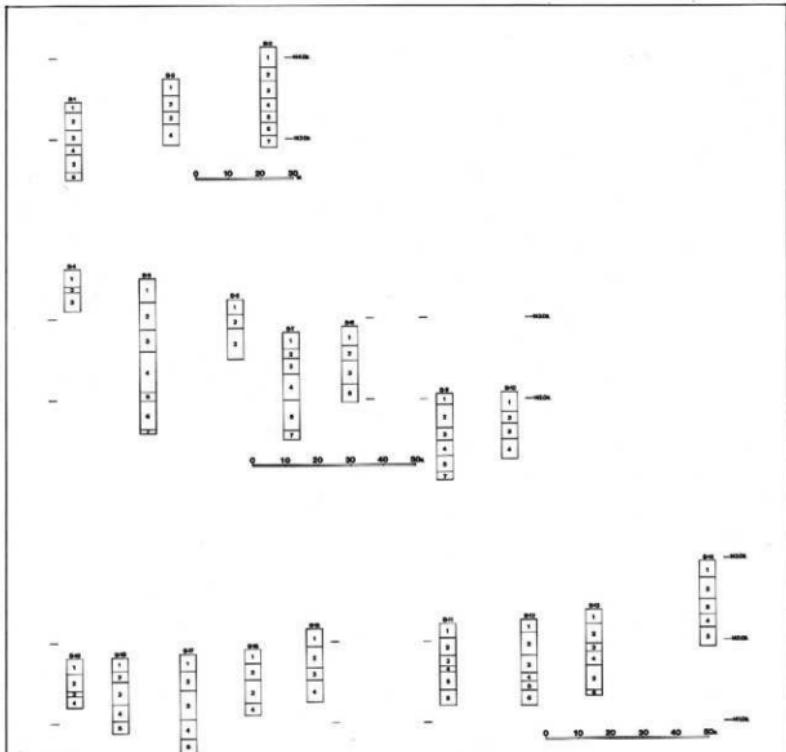


図3 トレンチ土層柱状図

- 1、耕土
- 2、床土（黄灰色砂質土）
- 3、黄～茶灰色砂質土
- 4、茶灰色粘質土
- 5、（暗）灰色粘質土
- 6、暗灰～黒褐色粘質土
- 7、青灰色砂

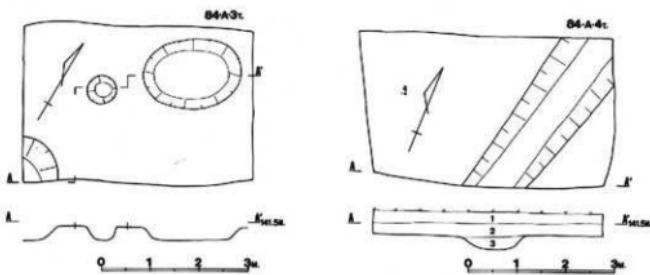


図4 A-3 A-4 トレンチ実測図

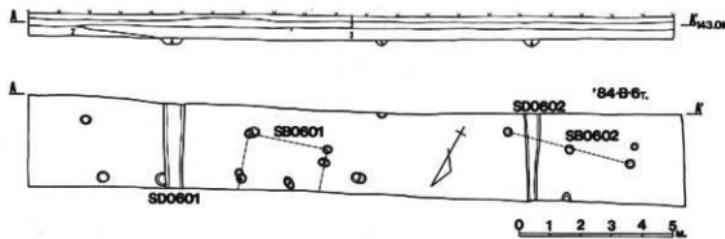


図5 B-6 トレンチ実測図

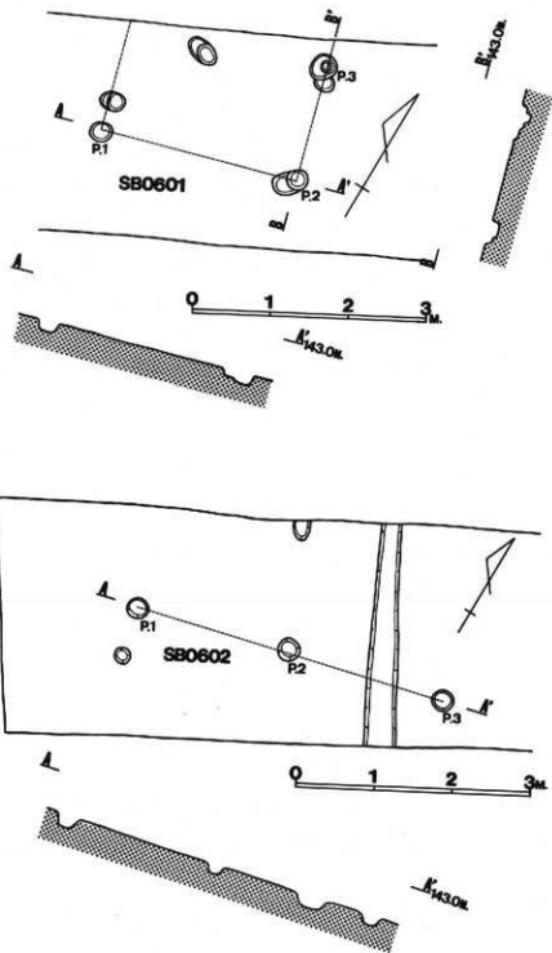


図 6 S B0601,02実測図

5. 出土遺物

B・5 トレンチで、須恵器の表体部と思われる破片、およびB地区の堆土中より、須恵器・土師器の小片を少量採集したが、いずれも図化するに足りない。

6. まとめ

今回の調査では、若干の掘立柱建物、溝などを検出したのみで、遺構の抜がりは認められなかった。B・6 トレンチ周辺に今少しの遺構の包蔵が予想されるものの、概して跡跡の外辺部を成すと思われる。したがって外広遺跡の中心は、奈良時代から平安時代にかけての遺物がより集中的に見られる、東方の小扇状地付近に存在すると考えられる。また、同じく今年度の県営は場整備に伴う調査で、古墳時代後期の堅穴住居跡、奈良時代の掘立柱建物、溝などが確認された南隣の日野町宮ノ前跡^①との関連も含めて、今後の調査が期待される。

【注】

- ① 『近江蒲生郡志』巻1 1922
- ② 蒲生町教育委員会技師北川浩氏の教示を得た。本書第3章参照。
- ③ 日永伊久男「日野地方の方形周溝墓 日野町内池 内池遺跡」(『滋賀文化財だより』No74 1983)
- ④ 滋賀県教育委員会「蒲生郡日野町小御門古墳群調査概要」(1966)
- ⑤ ③に同じ。
- ⑥ 日野町教育委員会技師日永伊久男氏の教示を得た。本書第1章参照。
- ⑦ 近藤滋、松沢修「蒲生郡蒲生町・日野町宮川・岡本古窯跡 大谷古窯跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和50年度 1975)
- ⑧ 日永伊久男「日野町の位置と環境」(『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集 1984)
- ⑨ 池内順一郎「蒲生郡蒲生町」(『角川日本地名大辞典』25—滋賀県— 角川書店 1979)
- ⑩ ⑨に同じ。
- ⑪ ⑥に同じ。

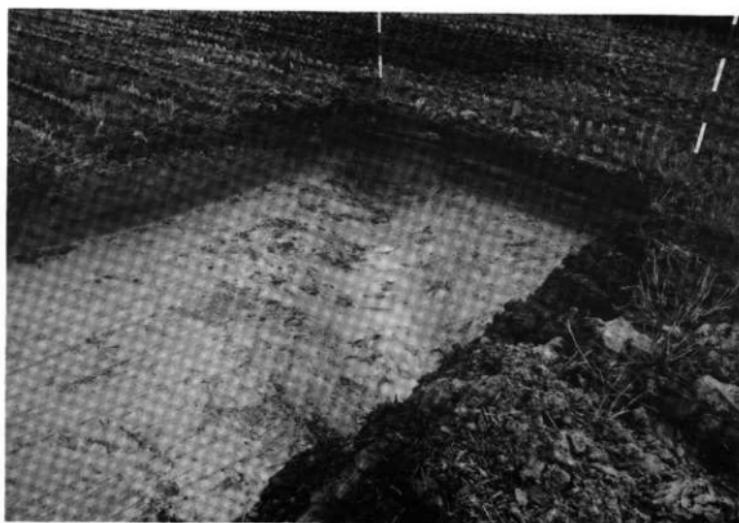
図 版



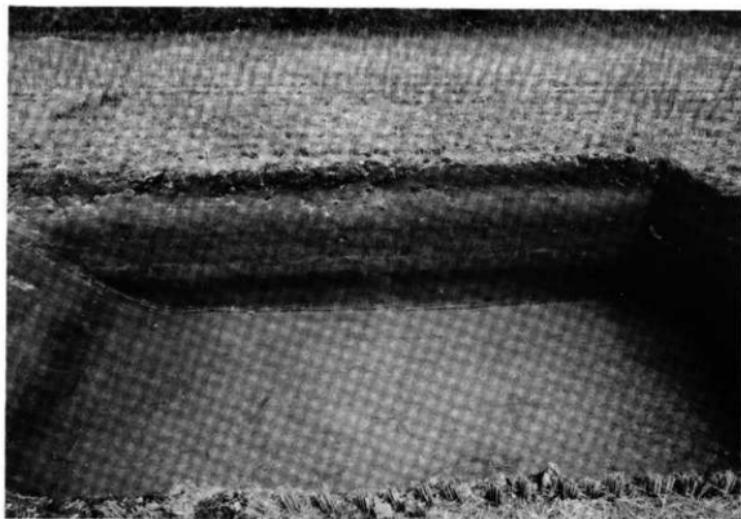
1、調査地遠景（南から）



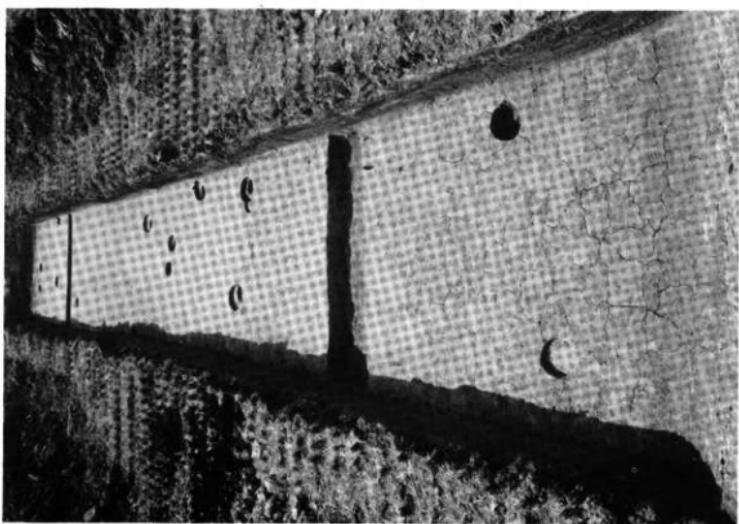
2、A地区調査状況



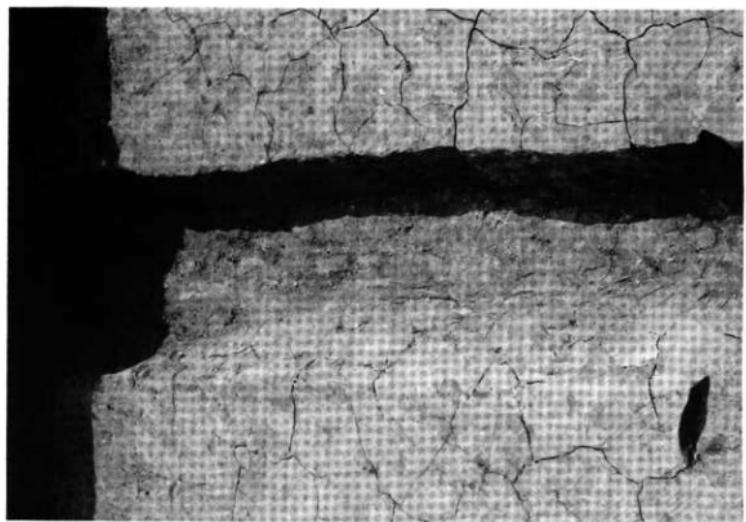
3、A・4 トレンチ溝検出状況



4、B・3 トレンチ全景（西から）



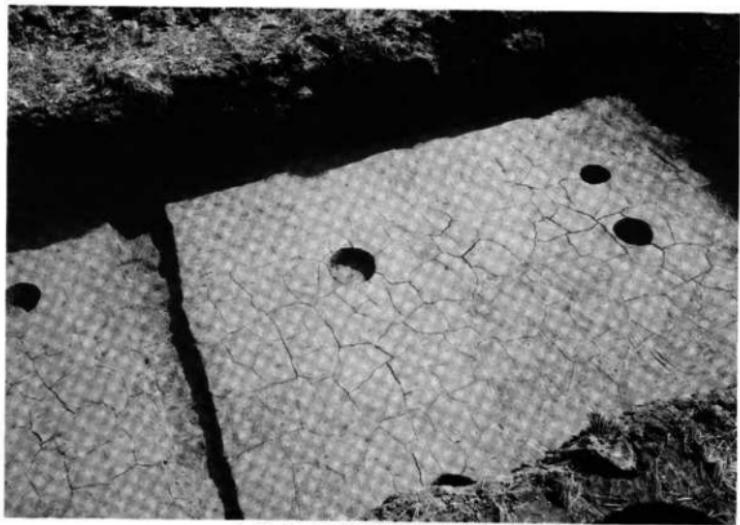
5' B-6-△八木側壁(城内)



6' B-6-△八木 60060-



7、B・6 トレンチ S B 0601



8、B・6 トレンチ S B 0602、S D 0602

第 3 章

蒲生郡蒲生町野瀬遺跡

1. はじめに

本報告は、昭和59年度県営ほ場整備事業（蒲生西部地区蒲生堂工区）に伴う蒲生郡蒲生町野瀬遺跡の発掘調査にかかるものである。

調査は、滋賀県教育委員会が同農林部から依頼と経費（888,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会文化財保護課主査田中勝弘、技師葛野泰樹、技師田路正幸

調査担当 同上田路正幸

調査補助員 藤浩司、奥田浩人、井田泰弘、小杉昌史、岡治博之、出路清久、福本光宏、西埜博、沢村栄治

調査期間 昭和59年11月5日～11月29日

調査にあたっては、蒲生町教育委員会をはじめ、滋賀県農林部耕地建設課、同八日市市県事務所上地改良第二課、蒲生町上地改良課、同町蒲生堂地区、同土地改良区の方々に協力を仰いだ。また、蒲生町教育委員会技師北川浩氏には、調査の全般にわたって、多くの協力と教示を得た。とくに記して感謝する。

なお、本報告の執筆、編集には田路があたった。

本文中に使用した造構番号の略記号は次のとおりである。

S D：溝状造構 SK：土塹状造構 S E：井戸状造構 S B：掘立柱建物

数字の上二桁は、トレンチ番号を表わす。

2. 位置と環境（図1）

野瀬遺跡は、滋賀県蒲生郡蒲生町宮井から蒲生堂地先にかけて所在する弥生時代から鎌倉時代にわたる複合遺跡である。当該地は、鈴鹿山系水口近隣に端を発し、蒲生郡日野町内を抜けて北西流する日野川と、綿向山西麓から、同じく日野町北部を西流してくる佐久良川とが合流する地点の南方約0.5km、日野川左岸に立地している。標高は、調査地点周辺で概ね、118m前後を測る。

野瀬遺跡のほぼ中心には、創建が白鳳時代にさかのはり、およそ1.5町四方の寺域が想定されている寺院跡の宮井遺跡（宮井庵寺）が存在する。想定寺域内では、塔跡と考えられる石積基壇をもつ建物、その北東で瓦積基壇建物、さらに階段を有する石積基壇建物などが確認され、現在も、周辺地割り、塔跡などが保存されている^①。出土遺物では、雷文系軒丸瓦、塑像仏、泥塔などが知られる。また、今年度実施された蒲生西部地区宮井工区の県営は場整備に伴う発掘調査では、想定寺域の北側一帯で、奈良時代から平安時代を中心とした掘立柱建物、寺域の北限を画すると見られる溝、丸太材を枠にもつ井戸など、寺院に関連する多くの遺構が確認されている^②。さらに、本報告調査地点のすぐ北側の調査区では、弥生時代中期後半に位置づけられる方形周溝墓群、鎌倉時代の掘立柱建物、木棺墓などが検出された^③。今回報告する調査地点は、寺院跡の南方約0.4kmの地点にあたる。

蒲生町内では現在までに、60ヶ所程の遺跡が知られているが、縄文時代では東方約1.3kmの堂田遺跡、弥生時代では、当野瀬遺跡などがわずかに知れるのみである。

古墳時代に入ると、雪野山東方の平野部に久保田山古墳（径約54m、幅約15mの周濠を有する円墳）、大乞山古墳（東西約62m、南北約65m、22m前後の周濠を有する方墳）が現存し、元は10基を越える一大古墳群であったと想定される木村古墳群が中期に営まれている。古墳時代後期には、雪野山山腹一帯に平石古墳群^④（八日市市、総計62基）定石古墳群（円墳5基）、天狗前古墳群、（円墳5基）など、横穴式石室を主体とする古墳群が密集しているが、同時期の集落跡はいまひとつ明らかではない。生産遺跡では、野瀬遺跡の西南方約0.5kmの辻岡山A遺跡^⑤で、6世紀中葉を中心とする須恵器窯が知られている。（宮川古窯跡）隣接する辻岡山B遺跡は、奈良時代の瓦窯跡である。

古代寺院跡としては、上記宮井遺跡をはじめ、同じく白鳳期の創建と考えられている宮川庵寺、昭和56年度に調査され、奈良時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物、瓦器を多量に出土する土塙などが確認された蒲生堂遺跡^⑥、あるいは堂の前遺跡などがある。

中世にいたると、現在の市子地区を中心に市子莊が置かれ、城山の字名や、堀・土塙跡などを残す鎌倉時代の館跡とされる上南遺跡、室町時代の陣屋跡と伝えられる大森遺跡などが所在している。

また今回の調査地点は、詳細は不明であるが寺院跡と見られている蟻王子遺跡とも接している。

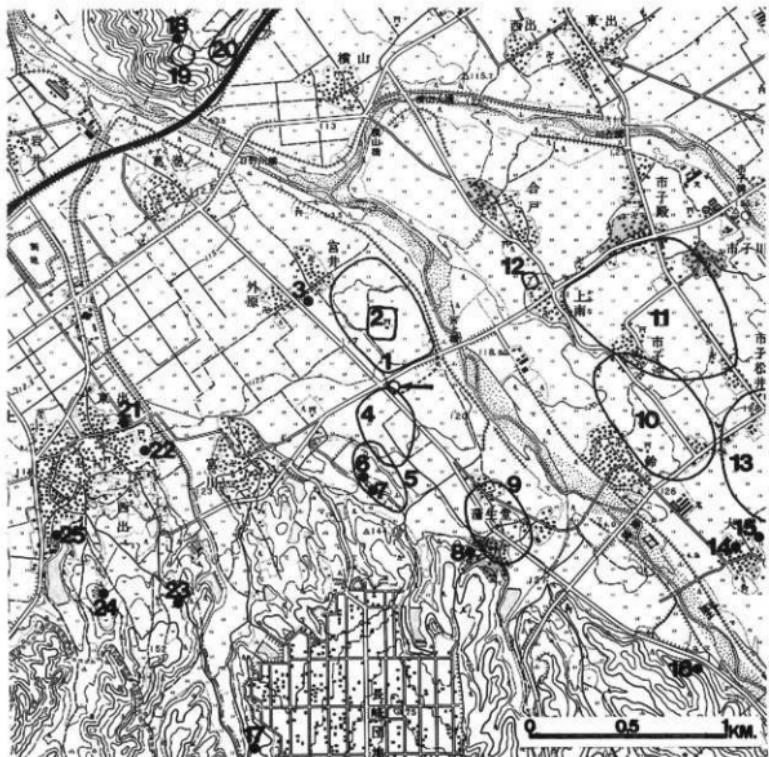


図1 野瀬遺跡の位置と周辺の遺跡（矢印は調査地点）

- 1.野瀬遺跡
- 2.宮井遺跡
- 3.堂の前遺跡
- 4.蟻王子遺跡
- 5.宮川遺跡
- 6.辻岡山A遺跡
- 7.辻岡山B遺跡
- 8.上の山遺跡
- 9.蒲生堂遺跡
- 10.堂田遺跡
- 11.市子遺跡
- 12.上南遺跡
- 13.田井遺跡
- 14.下森遺跡
- 15.塚田遺跡
- 16.法源遺跡
- 17.法教寺遺跡
- 18.谷内遺跡
- 19.香積寺遺跡
- 20.天狗前遺跡
- 21.東出北遺跡(以下蒲生郡奄王町)
- 22.東出南遺跡
- 23.法教寺遺跡
- 24.獅々垣遺跡
- 25.小路海遺跡

3. 調査経過（図2）

今年度の調査では、蒲生西部地区蒲生堂工区の北東部、主要地方道近江八幡土山線と、県道桜川西竜王線の交差点の東南に、第1号支線排水路敷に沿って、東側から、第1・2トレント、交差点東南角の倉庫を囲んで第3・4トレントを設定した。第1トレントは幅6~11m、長さ62m、第2トレントは幅3m、長さ52m、第3トレントは幅3m、長さ32m、第4トレントは幅3m、長さ51mである。

当該地点は、野瀬遺跡の南、蟻王子遺跡の東はずれに当たり、両遺跡間のちょうど空隙に位置していたために、当初発掘調査の予定を立てていない場所であった。ところが、排水路工事に伴う整地作業が開始された時点、すなわち、第1トレントを設定した部分で、溝状造構（SD0101としたもの）の平面が一部確認されたために、急速、調査体制を組織し、発掘を実施したものである。したがって、第1トレントの耕土の上面はすでに削平を受けており、とくに東半部では、一部遺構面の露出が見られた。このため、第1トレントに関しては、上記の溝状造構の残存状況を把握するために、幅を拡張することにした。

第2トレントから第4トレントにかけては、耕土を除去した段階で、黄灰褐色の砂質土が、認められたが遺構は検出されず、さらにこの層を除去することにした。現地表下0.5m前後で、遺構面である茶灰色系の砂質土が現われる。

現地調査は昭和59年11月5日より開始し、第1トレントから順次、機械力による表土除去、遺構検出、写真撮影、実測作業などを行い、11月29日に終了した。

また、遺跡名を付するにあたっては、県道をはさんで北20mの地点で、同じく県営ほ場整備（蒲生西部地区宮井工区）に伴う野瀬遺跡の調査⁹が行われ、本調査の第1トレント SD0102なども一群のものと考えられるために、本地点が野瀬遺跡の南限を形成するものと理解した。

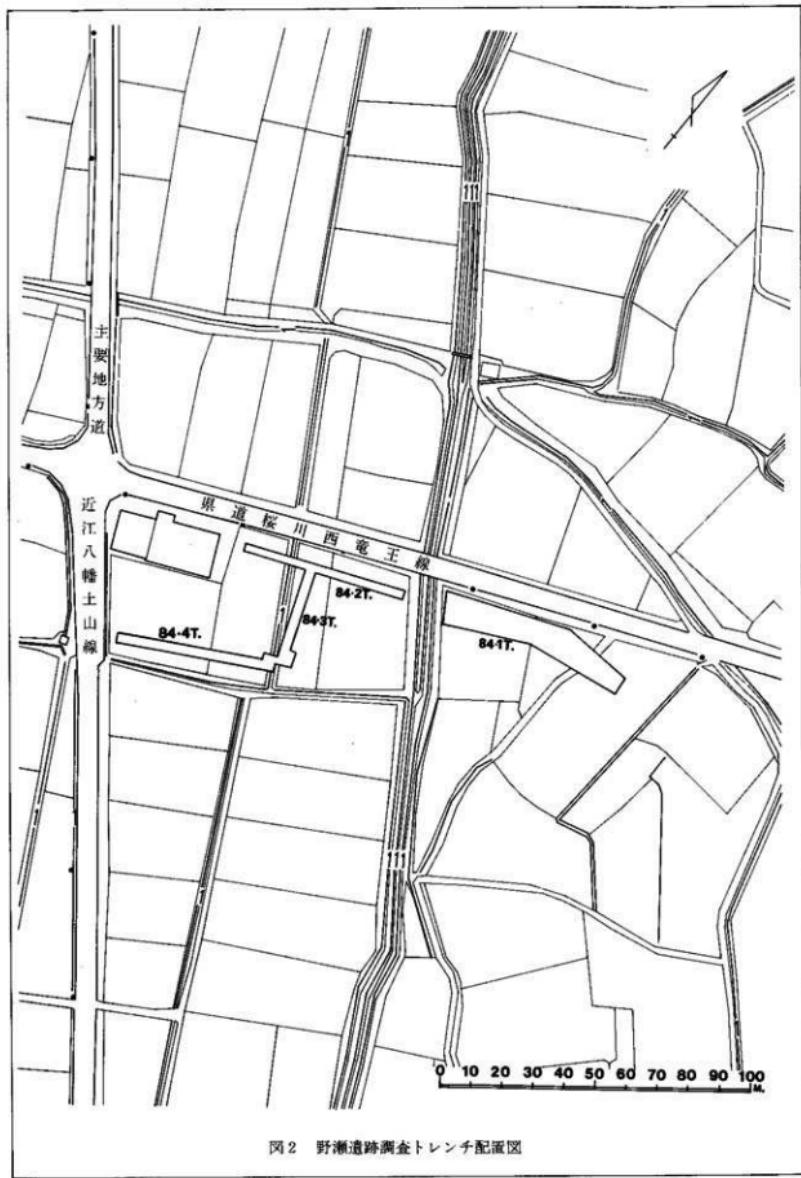


図2 野瀬遺跡調査トレンチ配図

4. 検出遺構（図3～5）

1. 第1トレント 溝状遺構5、掘立柱建物1、土庇状遺構2を検出した。基本層序は第1層耕土で、その直下で、黄褐色砂質土の遺構面があらわれる。遺構面の標高は、西側で117.4m前後、東側で116.8m前後を測る。また、トレントの東端は、流水による擾乱をうけていた。

S D O 1 0 1 トレント中央やや東寄りで検出した。幅約1.5～1.9m、深さ0.6m前後を測り、東側へ向けてやや弯曲する。溝内の堆積土は、大別して二層に分れ、上層は茶～黒灰色粘質土、下層は暗灰色の粘質土である。その間にところどころ、淡灰色の砂層がブロック状に堆積していた。溝内からの土器の出土はなく、下層より多くの自然木片とともに、板状木製品（図6）が出土した。

遺構検出の段階では、溝の東側で南北7m以上、東西12.5mのテラス状の地山の露出が見られたため、方形周溝状遺構と想定していたが、東側が流水による擾乱をうけていたために、確認を得ることができなかつた。

S D O 1 0 2 トレント中央やや西寄り、北側で検出した。幅0.8m前後、深さ0.4m前後を測り、南北に屈曲部をもつ。南北4.5m以上、東西8.0m以上あり、東部分でやや蛇行するが、方形周溝状遺構の南半分と考えられる。溝内の埋土は暗茶褐色の粘質土であり、遺物の出土はない。溝の北側での土塙等の遺構は見い出せなかつた。

S D O 1 0 3 S D O 1 0 2 のすぐ西側の南北方向の溝で、9.2m分を検出した。幅0.4～0.8m、深さ0.4m前後を測る。溝内の埋土は、上層が暗茶褐色砂質土、下層が暗茶灰色砂質土である。遺物の出土はない。

S D O 1 0 4 トレントの西端付近で、10m分を検出した。西端でS D O 1 0 5 に切られている。幅0.9～1.4m、深さ0.35～0.4mを測る。埋土は茶褐色の砂質土である。遺物の出土はない。

S D O 1 0 5 トレント西端で、南北10.7m分を検出した。幅2.1～2.5m、深さ0.15mを測る。埋土は茶灰色砂質土である。わずかに上師器および磁器片が出土しているがいずれも細片のため、時期を窺うには足りない。第1トレントの遺構の中では、最も新しいものであると考えられる。

S B O 1 0 1(図4) トレント西部北寄りで検出した掘立柱建物である。桁行は、北列1間、南列2間、梁行は1間であり、方位は、N 63°Eを示している。柱間距離は、桁行で2.2mと2.3m、梁行で2.2mを測る。柱穴は、西南に張り出すものが一辺0.35mの隅丸方形を呈するほかは、径0.3～0.45mの円形である。柱痕は、径0.15～0.25m、深さは0.35～0.40mを測る。東南隅の柱穴から、土師器皿(9)と、瓦器の小皿片(10)が、また、東北隅の柱穴から上師器皿、甕の細片が出土している。

S K O 1 0 1 S B O 1 0 1 の西側で検出した、長径1.1m、短径0.7m、深さ0.3mの長円形

の土塙である。埋土は灰褐色の砂質土で、遺物の出土はない。検出位置より、SB0101に付随するものと考えられる。

SK0102 トレンチの西部、SD0104の東肩付近で検出した。南北0.9m、東西0.8m、深さ0.27mの隅丸方形を呈する土塙である。土塙内北半部を中心に土師器皿(1~7)が多く細片とともに出土した。また、土塙内には焼土の堆積が全面に認められた。

2. 第2トレンチ 第1トレンチの西側に設定したところ、溝状造構6、土塙状造構5、井戸状造構1を検出した。基本層序は第1層耕土、第2層黄灰褐色砂質土で、第2層の直下、現田面より0.5m下で造構面が現われる。造構面の標高は、概ね117.2~117.3mを測る。なお、トレンチ西部の土塙群は断面観察より、耕土直下から堀り込まれていた。

SD0201 トレンチ中央付近で、南北3.2m分を検出した。幅1.1m、深さ0.15m前後を測り、方位はN28°Wを示す。溝内には茶灰色砂質土が堆積し、中央付近から瓦器の焼跡が出土している。

SD0202~06 SD0201の東、約9.3~17.3mの間で、平行する溝5条を検出した。幅はいずれも0.4~0.6m、深さ0.15m前後を測る。溝内の埋土は、SD0201と同じで、いずれも茶灰色の砂質土である。遺物の出土はない。

SK0201~05 トレンチ西部で4基、SD0201の東側で1基を検出した。規模と形態は全形の知れる01、05で一辺1.2~1.6mの方形を呈する。深さは、耕土直下から約0.9mを測る。土塙内には、地山土を含む、青灰色および茶灰色粘質土が乱雑に堆積している。土塙を穿ったのち、同じ土を埋め戻したと考えられる。いずれからも遺物の出土はない。

SE0201 トレンチの中央やや西寄りで検出した。南北2.2mのやや長円形の井戸跡と考えられる造構である。深さは約0.95mを測り、上層には青灰色系の粘質土、下層には茶灰色系の粘質土が堆積する。造構の底面と考えられる青灰色粗砂層を検出したところで、湧水を見た。遺物の出土、井戸枠等の痕跡は認められない。

3. 第3トレンチ 第2トレンチの南に直交するトレンチである。土塙状造構6を検出した。基本層序は第2トレンチと同様、第1層耕土、第2層黄灰褐色砂質土で、第2層直下で造構面を検出した。造構面の標高は117.2m前後である。

SK0301 トレンチ北端で検出した。長辺1.7m、短辺1.1mの長方形の土塙である。深さは、0.05mと浅く、遺物の出土はない。

SK0302 トレンチ中央付近で検出した土塙である。南北2.1m、東西2.2m以上、深さ0.03m前後を測る。中央付近より土師器細片が出土している。

SK0303 SK0302の南約5mで検出した。南北辺3.2m、東西辺1.2m、深さ0.11m前後の長方形の土塙である。遺物の出土はない。

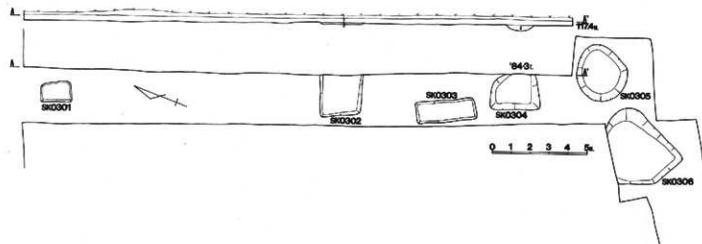
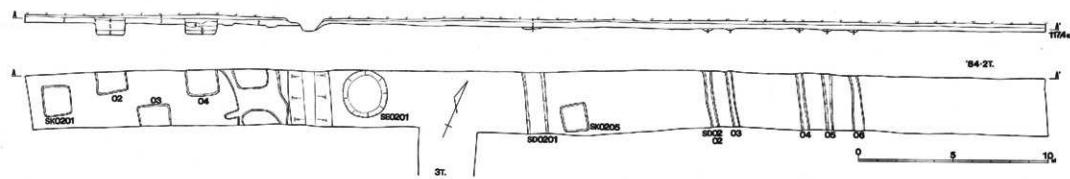
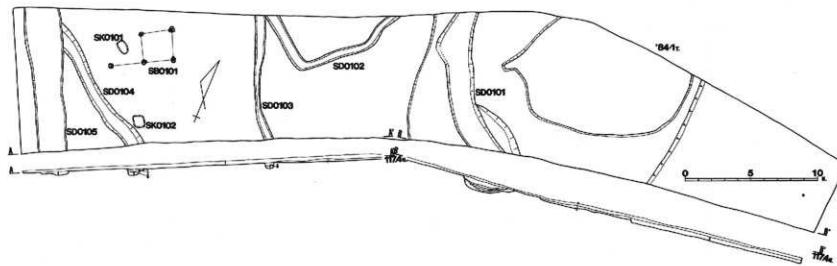


図3 第1～3トレンチ実測図

SK0304 SK0303の南で検出した南北2.7m、東西1.9mの不整方形の土塙である。深さは0.45m前後を測り、遺物の出土はない。

SK0305 トレンチ南端で検出した。径2.7~3.0mのやや不整形な円形を呈する。深さは0.32m前後を測る。遺物の出土はない。井戸跡の可能性もある。

SK0306 トレンチ南端やや西寄りで検出した。東西幅4.0m、南北幅3.7m以上、不整形の土塙である。深さ0.32m前後を測る。遺物の出土はない。

4. 第4トレンチ 調査区南西部に設定した。第3トレンチとほぼ直交する。土塙状造構3、小土塙、ピット状造構を検出した。基本層序は、第2・3トレンチと同様である。造構面の標高は、117.1~117.2m前後を測る。

SK0401 トレンチ東端で検出した。東西辺3.2m、南北辺1.5m以上の隅丸方形の土塙である。深さは0.55m前後を測る。埋土は、茶~暗青灰色の粘質土で、遺物の出土はない。

SK0402 トレンチ西部で検出した。東西1.7m、南北1.7m以上のほぼ方形を呈する土塙である。深さは、0.34mを測る。土師器皿の小片(12)が出土した。

SK0403 トレンチ西部、SK0402のさらに西で検出した。東西1.6m、南北0.8m以上のほぼ方形の土塙である。深さは、0.16m前後を測り、遺物の出土はない。

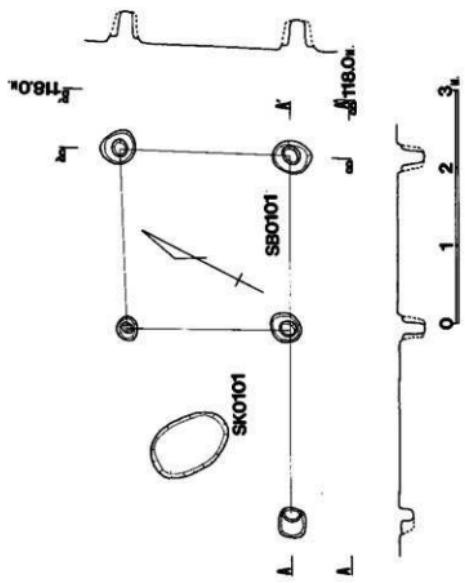


図4 S B0101 S K0101

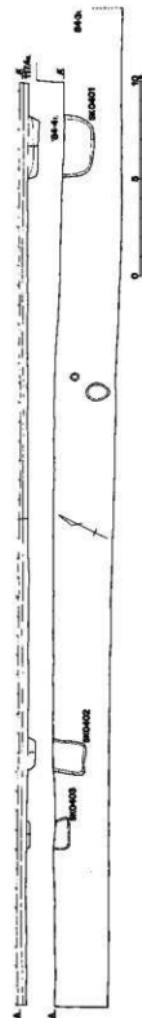


図5 第4 レンチ実測図

5. 出土遺物（図6.7）

出土遺物は、調査範囲に比べて少量である。第1トレンチは、耕土直下で遺構面の検出を見たため、遺物包含層は存在せず、また第2から第4トレンチにかけて堆積する、第2層黄灰褐色砂質土中にもほとんど遺物は包含されていなかった。ここでは、遺構に伴うものを中心に概述する。遺物の残りは全体的に良好とは言えず、器面も磨滅したものが多い。

S D O 1 0 1 板状木製品（図6）が出土している。縦11.5cm、横13.4cmの方形を呈し、厚さ0.5~1.0cmを測る。一面の上端と下端を1cm前後、斜め方向に削り落として面をもたせている。反対側の面の上端直下には幅0.5cm程のタガを締めたような痕跡がある。用途は判然としない。

S K O 1 0 2 土師器皿（1~7）が出土している。他にも、細片が多くあるが、いずれも土師器皿のものと見られ、他の器種の破片は認められない。1~4は、大型の皿で口径は、12.4~13.7cm、器高は、2.0~2.3cmを測る。底部はいずれも欠失している。口縁部は内わん気味に開き、端部は外面に横なでによる面を有し、断面三角形を呈するものがある。口縁部外面を横なで、体部は、指おさえやなでで調整する。内面は、なでを施している。5は、口径10.8cm、器高1.5cmを測る出土品中では中型の皿である。形態、調整は大型のものと同様である。6・7は、口径8.8cmと8.2cm、器高は1.5cmと1.4cmを測る小型の皿である。底部から口縁部にかけてゆるやかに内わんし、端部はまるくおさめている。内外面とも横なでで調整する。

色調は、いずれも淡橙褐色を呈し、焼成は軟質であるため、器面荒れが著しい。

S B O 1 0 1 東南隅の柱穴掘方より出土したものを図化し得た。8は小型の土師器皿で、口径は9.6cmを測る。口縁部内外面とも横なでを施している。9も土師器皿の口縁部である。SKO102出土の大形のものと同形態のものと思われる。10は、瓦器の小皿口縁部片である。口縁部はやや外反気味で、端部はまるくおさめている。色調は内外面とも銀黒色を呈する。胎土は精良で、明灰褐色を呈している。

S D O 2 0 1 11は、口径14.6cm、底径3.6cm、器高4.7cmを測る瓦器碗である。体部から口縁部にかけてゆるやかに内わんし、端部内面に一条の凹線を巡らす。器厚は0.3cmと薄手である。高台は、高さ0.3cm、厚さ0.2cmで断面方形を呈するが、全体的に弱小な印象を与える。調整は、体部から口縁部にかけて、横方向の0.1cm幅のへら磨きを施すが、口縁部付近は粗らになる。内面底部は、器面荒れのため不明である。外面は、口縁部を横なでし、体部は指頭痕が残っている。焼成はやや軟質であるが、色調は内外面ともに黒色を呈し、胎土は緻密、灰色を呈する。

S K O 4 0 2 12は口径7.3cm、器高1.1cmを測る小型の土師皿である。手づくねで成形している。明褐色を呈し、焼成は軟質である。

第4トレンチ遺構面 13は須恵器の坏身底部片である。底部はヘラ切り、体部内外面とも横

なで調整である。14は須恵器甕の口縁部片で、端部を下方にやや肥厚させている。自然釉の付着を見る。

以上の遺物はいずれも小片であり、全形を知りうるものではないが、比較的形態のわかるものについて若干の時期的位置づけを考えておきたい。

まず、瓦器甕11は内面のへら磨きにやや粗放化が窺え、外面にはへら磨きが施されていない。高台にも退化傾向が見え、概して製作技法の簡略化が進んでいると言える。白石太一郎氏^⑨が、第II段階第6型式で提示された特徴に合致し、12世紀後半の時期が考えられる。

SK0102出土の土師皿は、大型・小型ともに口縁部外面を二段に横なでし、とくに大型皿の口縁端部は外面に面をもっている。平安京編年^⑩にして、平安京IV期新段階から中世京都I期古段階のものに形態が似ることより、12世紀後半から13世紀初頭頃に位置づけられる。SB0101柱穴出土のものも同時期のものと考えられる。

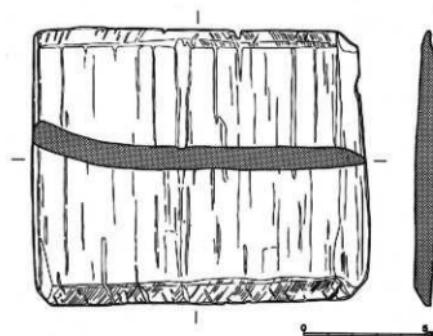


図6 S D0101出土遺物

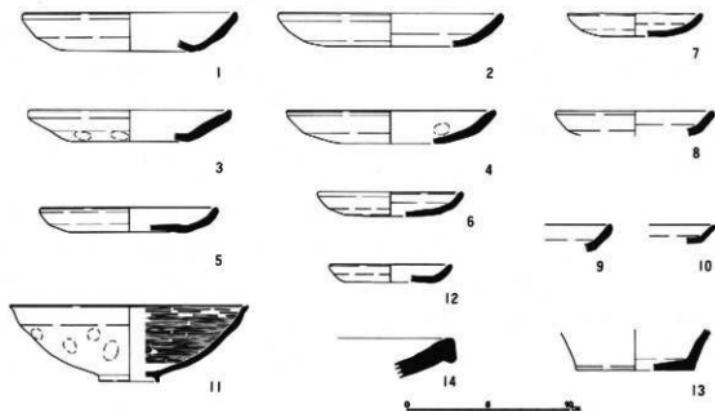


図7 出土遺物

6. まとめ

今回の調査では、溝状遺構11、掘立柱建物1、井戸状遺構1、土塹状遺構16などを検出した。まず、溝状遺構であるが、SD0101は当初、方形周溝状遺構と予想していたものであるが、時期を裏づける土器の出土がなく、またテラス状に地山が残る部分での主体部となる遺構も認められなかった。溝内の埋土の堆積状況を見ても、自然流路である可能性が強い。SD0102からも遺物の出土、主体部の検出がないが、県道をはさんだ北側で弥生時代中期後半に位置づけられる方形周溝墓が4基程、確認されており^①、一群のものと考えられる。蒲生町内での弥生時代の様相はいまだ、明らかにされていない。周辺地域では八日市市内堀遺跡^②(弥生時代中期中葉～後葉)、日野町内池遺跡^③(弥生時代中期後葉)などで、方形周溝墓群が確認されている。野瀬遺跡周辺での、同時期集落の存在が予想される。

第2トレンチで検出したSD0201は、出土遺物より、平安時代後期に位置づけられる。SD0202～06も、01と平行すること、埋土が同質であることから、同時期に属するものであろう。

一棟のみの検出である掘立建物SB0101は、1間×1間の南列西側にもう一つの柱穴と、土塙を備えている。掘立柱建物に土塙が付随する例は、規模は異なるが犬上郡甲良町法養寺遺跡^④で検出されている。SB0101は西側に廂を張り出した小規模な納屋に類するものであろうか。平安時代後期から鎌倉時代初頭に位置づけられる。

第2トレンチ東部を中心で検出された、一辺1.5m前後の方形土塙からは、遺物の出土はなく、いつの時期のものかわからない。しかし、県道北側の調査では同様の土塙から磁器の出土が認められており、最近まで盛んに行われたと伝えられる瓦の原料である粘土の採掘場と考えられる。

その他の遺構では、井戸と想定したSE0201をはじめ、時期・性格ともに不明のものが多い。

今回の調査地点は、宮井遺跡の南約0.4kmにあたるが、寺院に関係する遺構遺物は全く認められなかった。想定寺域周辺部では、今年度調査が行われた北西部に関係遺構が集中することが明らかになった。南側には、本調査地点を含めて、寺院関連遺構は存在せず、かわって、平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構が一部検出されたことは、むしろ実態の知られていない、蟻王子遺跡や、さらに蒲生堂遺跡との関連を示唆するものかも知れない。

【注】

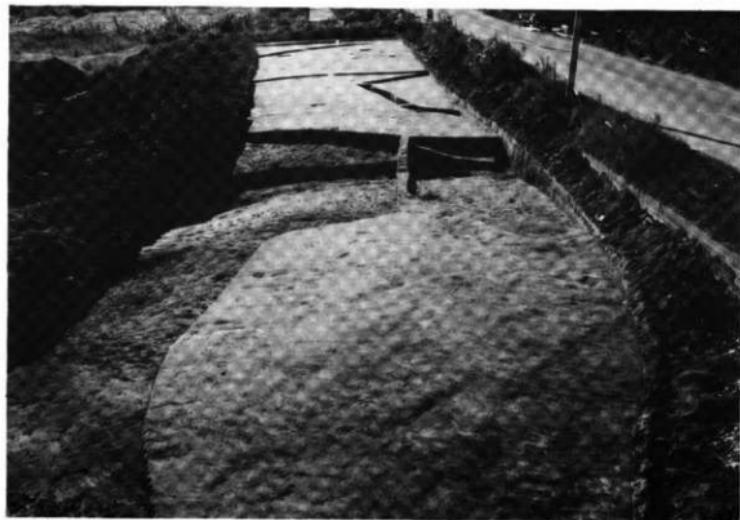
- ① 北川浩「瓦積み基壇をもつ白鳳寺院 蒲生町宮井 宮井廃寺跡」(『滋賀文化財だより』No.74 1983)

- ② 蒲生町教育委員会技師北川浩氏に現地調査をお願いした。同氏の教示による。
- ③ ②と同じ。
- ④ 蒲生町教育委員会「木村古墳群発掘調査概要報告書」(『蒲生町文化財資料集』1 1983)
- ⑤ 丸山竜平「古代のあけぼの 後期古墳と群集墳の世界」(『八日市市史』第1巻—古代—1983)
- ⑥ 近藤滋、松沢修「蒲生郡蒲生町・日野町宮川・岡本古窯跡 大谷古窯跡調査報告」
(『滋賀県文化財調査年報』昭和50年度 1975)
- ⑦ 昭和56年度調査
- ⑧ ②と同じ
- ⑨ 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」(『古代学研究』54号 1969)
- ⑩ 京都大学埋蔵文化財センター『京都大学埋蔵文化財調査報告』II (1981)
- ⑪ ②と同じ
- ⑫ 石原道洋「内堀遺跡・後藤館跡発掘調査報告書」(『八日市市文化財調査報告』2 1983)
- ⑬ 日永伊久男「日野地方の方形周溝墓 日野町内池 内池遺跡」(『滋賀文化財だより』No.74 1983)
- ⑭ 萩野泰樹「犬上郡甲良町法養寺遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』X-1 1983)

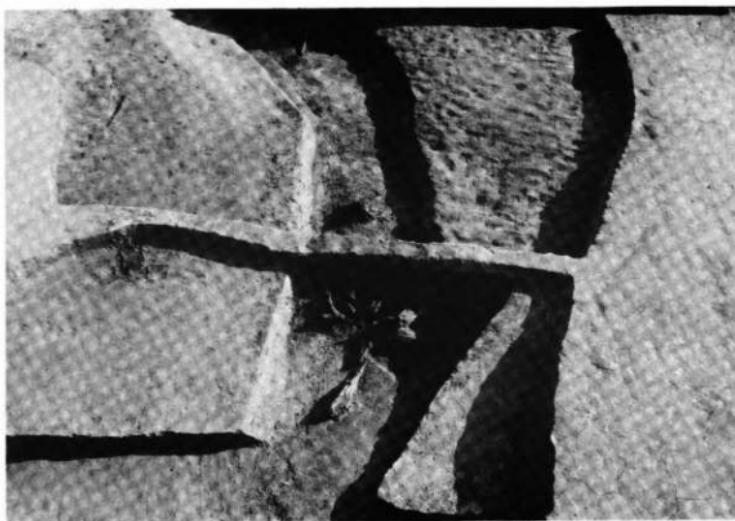
図 版



1、調査地遠景（西から）



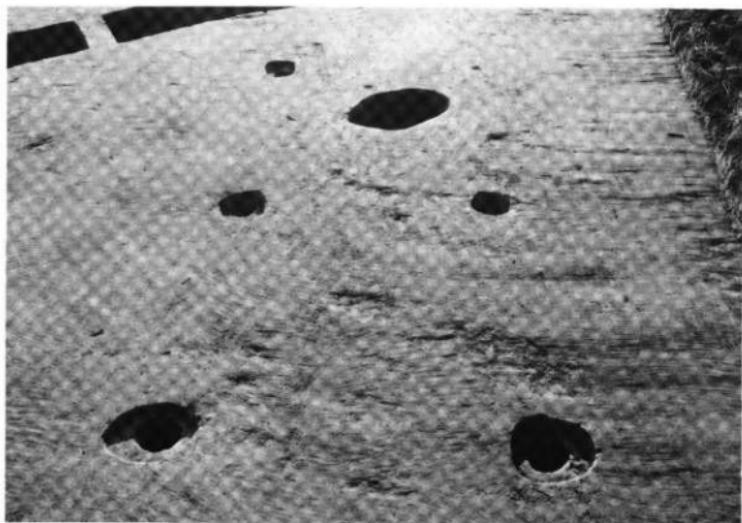
2、第1トレンチ全景（東から）



3、第Ⅰトレンチ S D0101



4、第Ⅰトレンチ S D0102



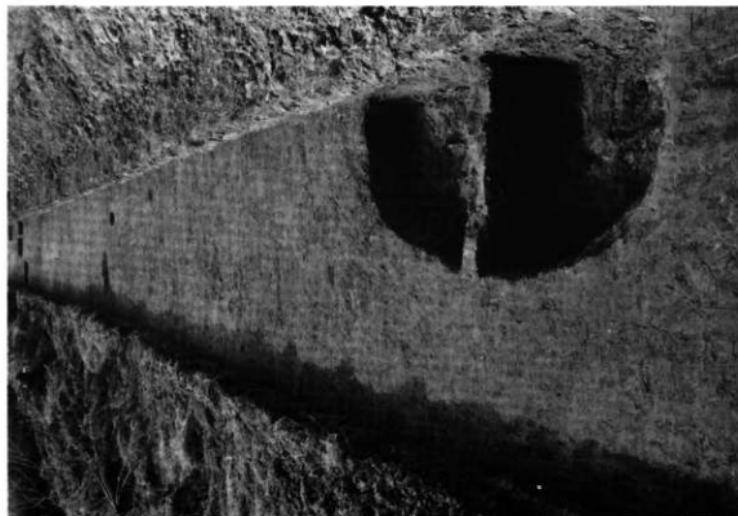
5、第1トレンチ S B0101、S K0101



6、第2トレンチ全景（東から）

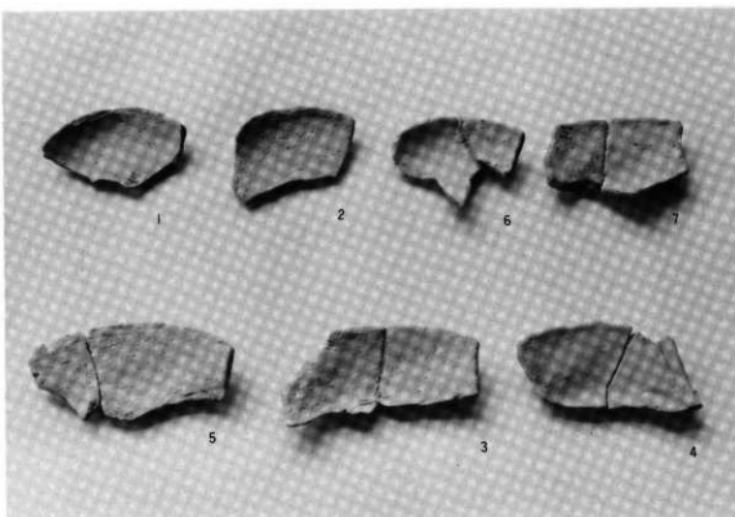


7' 距のスコ八水側面(距右)



8' 距のスコ八水側面(距左)

圖版五
野瀬遺跡出土遺物



I ~ 7 S K0102



II: S D0201



板狀木製品: S D0101

昭和60年3月
ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書
四 — 4

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財
保護課

大津市京町4丁目1番1号

Tel (0775) 24-1121(内線2536)

財団法人滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

Tel (0775) 48-9780・48-9781

印刷・製本 明文舎印刷商事株式会社
長浜市朝日町22-16
Tel (0749) 63-1441(代)
